

911.3

7

911.3
—
7
—





袖珍抄百韻之部卷四

古終舍默池輯

次韻

表駮

晋伯倫傳酒德頌樂天德

以酒功讚昔追之續信德七

百五十韻

二百五十句

又つまひてのまもりく

吟の足雅子睡さく強きて 角

這句以_テ莊子_ノ可見矣 其角

強骨力たると不_レ成すてに 才磨

志とくくゆれ松_ノ好_クき 揚水

美_シく末てい_ハきを_レ得_ル子親 角

蟾_ノ心_ノく_レと_レ強_クきん月 死

微_レの中_ニ麻_ノく_レ山_ノれ_レ木_ノあり 水

酒_ノ下_ニ解_クく_レ黍_ノく_レれ_レ 度

徒_レす_レの_レ画_ノ眉_ノを_レ客_ノく_レつ_レん 角

怒_レる_レの_レ困_ノつ_レま_レて_レか_レして 角

木もじれを合ふ新の中を子 鹿
 先祖と云ふくまの歌うり 水
 燈と云く出天とせよ之と 角
 古きく人ふかつく引うけ 角
 武士れ又うくうとあれし 水
 女をふくにともまきとてむ 鹿
 さるわくく鏡のひつこく 角
 こころの猶ほ月う背る 角
 赤く橋て且つ易 川易志 鹿
 乳あくの聲の海を著大紫 水
 本秋とたを合とたのち 角
 白魚とたをすう餅春の宮 角
 寛平れがくへ流世合せあり 水
 湯土提灯と括して妙る 鹿
 くらたありうる女房のあまて 角
 血摺れ森とかや忍めん 角
 月あましむくうに記たはと 鹿
 因獄の云とりのくくく 水
 天帝と目安と書とてはく 角
 柱と地とく學種とくゆ 鹿

雨の掛子地のかすりのやかい 水
 秋と形して赤帯も此記 鹿
 白牛就仁紅系村と遠山 鹿
 湯の火紅朝を射る 角
 師魚の棘め緩い拍と刺身 鹿
 安座れ呷は流人方を後 水
 向後とてけはされ映種と 角
 枸杞と柳若れ鬼も乃現 鹿
 悪人の殺は似てるかりあか 水
 雨とくこのくまゆのま 鹿
 夕暮と息と短うと吐きか 鹿
 民屋何りて服とせえむ 角
 修いの木慈るまれ世の味く 鹿
 まくあわくく海安の古る 水
 丹元と人言侍と子向焼く 角
 あとれと文とおとるおとら 鹿
 殺垂く小神と何とりのあ 水
 転た中くくまにあおとら 鹿
 死く怒を神宮れ奇特と 鹿
 幣下りる来作れ化の色 角

富の家を酒のまじりたる
麿

摩子訶ち事シナイ若奈困コトまじり
角

老を控子を控ヒル處コト渡河コト眺望ヒラカシ
角

阿アとと落オて風カゼを吹フり吹フ
水

我ガれ念ネを初ハジめ採ツク足ツキけり
角

垣カキ割ワの音ネを人ヒト耳ミミに後ノチ立タ
唐

月の秋アキをミみえスに且ナカレ文フミて
水

素ソ衣イをミまシむ姉イモの落オ髮カミ
角

ニたれシて鏡カガミにミるル神カミのみよ
麿

後ノチと酒サケのりリ此ココ奥ウラをミてミ
角

小神コカミをミ木キ枕マクにミるル若ワカきキをミ
角

納戸の神と祈モリしまゆる 水
 煤掃之禮ニ用ニ於鯨之脯ホシ 角
 鹿山の為遠原より入 鹿
 風とくは之をさすうのれに 水
 煮屋より入此枯原をたぐ 鹿
 おるく白骨此鉄箱を付し死す 鹿
 為号利新活とよむに秋也 角
 得小傍豆越し母の泣き割む 鹿
 雷益鳴く芭蕉しるる鹿 水
 花れを船廻し幸と直き道 角
 橋しる子難とつら中ひ去 鹿
 三 お弟まひ息子のまは掃を掃 水
 箕と恙て多く花とくしん 鹿
 木のしれかしの枝ま葉干さ 鹿
 山彦嫁と抱てうせたり 角
 忍の少す人の地を歩む道 鹿
 木樨六十歩し木匠の登 水
 細屋に燈灯の燈籠照しる 角
 浦粘衣の裾しるしり浪 鹿
 海月舟舟地をたぐ夕暮る 水

去来ふしやる妻れ泉の 鹿
 浜骨れ紫しけれ赤と虫やつす 鹿
 ぼむくしあて地呪と化 角
 築地ある根の船を車引とめ 鹿
 天アホ大ヤミく園ヤミの垂けりつる 水
 三 切りの破木岩をいさし復し 角
 妻海若くしひ橋をうと浮 鹿
 花の蓮を芝し移ゆと賞ナホる 水
 月より秋とよふ東令の傍 鹿
 まゆきを草まきあす子石塚 鹿
 夕の海知りく美花ひりる 角
 樵の木の板橋しるしり舟 鹿
 枕の信とるる草葉散るむ 水
 爰れ方と何と秋意とよめ 角
 我し河の傍多しよきたき 鹿
 けつるを漕舟うれていさ 水
 泥城清く雨のたまし 鹿
 子のれく下あう東に雪あり 鹿
 秋の里れは河し病 角
 死し人声のふ忘布とす美 鹿

納戸の非を^{モノミ}禱し^{マシ}まらる

煤掃之禮^ニ用^ニ於鯨之脯^{ホシ}

鹿の角^カ歯^シ牙^キを^シり^ク

水^{ミヅ}を^シり^クて^シる^ク

鹿^カの^シ角^カを^シり^ク

鹿^カの^シ角^カを^シり^ク

鹿^カの^シ角^カを^シり^ク

鹿^カの^シ角^カを^シり^ク

水

角

鹿

水

鹿

鹿

角

鹿

さてもしびく美をわく秋もて 角
 母の移居士とくおやうき月 角
 子耕を志徳のほよたつて 水
 毒を薬ふけさう能はくえん 丸
 二 店をた敷入まやうり 角
 移りーやよれゆき底のま 角
 隙中より捉て段の雷の思書 丸
 提灯きんくまおのうけろい 水
 風をた角肉とをを懐く 角
 入丸の山ふみ狼うのり 角
 雷は芥下^下こくとあまうり 水
 玄く又玄く龍珠の團 丸
 倍よりの麻島の油ををるや 角
 朝の目れ赤中地赤螺 角
 何と見えて鈴の掃てまかんる 丸
 じそろうしと雨をまどる 水
 月を膏と草は紫の汗打端 角
 魚木うりあてを子^子ころろ 角
 二 赤麻の抱うひの敷ひしと 水
 三 ち汲衆く帯くり移 丸

冬をぶく人の志のひてあまうり 角
 提を子とたくおほろしれ君 角
 古をたはせやう周ふさへあはれん 丸
 いとちりれををくはれあうる 水
 麻は葉の中を小筋をわきせて 角
 ひとねさすぶるまの酒袖子 角
 きくおくとほき解すむ月よ 水
 ぬく掃葉をまけ後すあ 丸
 三 空をたをくけとよをる 角
 人死を待て生るあをいさし 角
 石か回たれめをを候おらう 丸
 木五りこのあてゆをを板 水
 三 飛雨をたれぬはあニ中ニま 角
 強るノ進ニサル解キラくニ 角
 大根は葉根の葉のををる 水
 雷はうり種よ文付くやる 丸
 おとちや大桶の煙の掃きま 角
 ありし一版よ蒲を引する 角
 もやいと葉入るくくはくまで 丸
 面の中首の危てたすすむ 水

子より中経得る是れぬらけ
 撥重子にみ海切しきそ
 ころひの材ぬとすし海路を
 傳しやすき海に舟する
 秋に霜抜切りよとては
 伝持ゆきしてぬる葉は戸
 切しるく重ぬをむひし工
 海志ちりしる海志はま
 意崎の松の娘の花は葉
 繋りきし海に唐にぬ
 ト向し海にぬの志しと
 地は葉とく子にぬ
 葉はき重唐にぬの我は物
 海志の目まき 子海
 月のも葉は味方の葉とて
 老尼男に叙 ツツ 何り重
 葉は子推ひしとて
 外里より葉に結引して入
 松茸よりしとて六括ひとて
 ぬはれ捕りしとてぬのい
 丸 水 角 丸 水 丸 角 丸 水 角 丸 水 角 丸 水 角 丸 水 角 丸

乙此植舞るの坊ふ喜すとて 白
 又此三代の刀く川瀬流 下
 永福の蓮をしく松の毛 化
 近江の田植英徳は御人 法
 とく起て時務よせし子祝 走
 和上桑の肉の浦ありんこ 角
 筑紫まそ人の娘をなきて 下
 孫助の事ふおのひ赤ぬし 松
 待宵の待の壁にるまの申 石
 友よふ城のあうた乃事 化
 由さそやうかうなる都景 舟
 門を急干ひ旅隠れ寺 白
 理不々にあふ武若赤六七結 走
 あう野此粒の赤石撰ふ 角
 鳩の一声夕日を月とあうたて 辨
 此れ能な秋さむきかり 下
 いふふまは木の万をたれんをせ 白
 つれあきひいり野ふ後とく 松
 人あまきまとう物さうりきり 掘水
 さうりひさむき山の内ら 法

三

乙此氏仙と名ある法かせ 角
 京よ汲きる理井の水 舟
 玉川やおのくさつのおよこ 石
 白湖くよまよりみりり 化
 卯の花のこね結ヒナチもてあふ 走
 外ヒナチとくせいの権ありこよう 水
 南むく首屋の畑は野流て 不卜
 釈と基を打屋のつまて 辨
 餅作る楯は炭柴を打金 松
 警入り買ろく秋れらるへ 石
 若れ喜を物いそぬ人のつらめ 法
 ふくら男の舞すむ月 卜
 管れ雨たすし七里とぬすん 下
 伴約河内のをれ川つら 水
 三ウ
 あり車乗つくあふあしめて 舟
 梅いさうりれ院くしの雨 千春
 二月の蓮葉人もまき先花 舟
 婦中川よれおそき日長歌 舟
 猶あにぬ越の端を織るて 石
 おもひあうそひ菅れ刈はし 松

昔は紫とあらしをききたる時 耕
 本意きこふる山をけふしも 下
 因人とやして休むる朝月夜 耕
 秋さしあすもあつれぬ 卜
 向く時ふと亮くふとをて 云
 ころあらしんせは静けさ 法
 三度佛菩薩の極くこれ山 化
 阿ふふまのまのころを家 下
 契情をいふれぬさうふと 耕
 陣ふみあふあつれつと 耕
 牛徳き筆おまをころりて 白
 柿まふ若きあはひあり茶 奇
 村雨ふふふふふふ吹けぬ 峡水
 飽とるおの沖もあつれふ 化
 修験をのら月ふれれ有る 卜
 梓えりきと橋つとる秋 下
 候きの法をる代やあやん 楊
 居士とあつれりかつ子の呪 耕
 何れも牡丹の里にまをさ 云
 中むむふふ出る温泉を 硬

岩根ふとまき地をさあは梓 南
 ころや之井のまは法はとも 舟
 連ぬ恵すれきやうと返あて 化
 管法をさす存の法はとも 電
 足貫れは屋山とあつれま 楊
 子春りあつれぬ法の法はとも 角
 舟のつれまあつれれ川は 松
 尾とるあつれぬ法の法はとも 岫
 探りあつれぬ法の法はとも 卜
 連れくつるまをさあは梓 白
 縁とるあつれぬ法の法はとも 藤
 まをさあつれぬ法の法はとも 云
 何れも法の法はともあは 卜
 雨双六の雷とあつれぬ 岫
 宵うつる蓋の障とあつれぬ 其角
 せんころあつれぬ法の法はとも 角
 春のあつれぬ法の法はとも 未
 梓相の文子とあつれぬ 竹
 孤村とあつれぬ法の法はとも 昨

昔は紫をまうみ香をたふ香

辨

本意きこるらん山をけふしも

下

因人をやそ体むる月夜

新

秋さしあやうもあつれあひ

ト

仰し時ふと香をたふ香

云

さうあつらん世か悔れう

法

三度瑞葉時の極しれ山

化

あつらん世のまのころを家

下

契情をいふれぬきのうをう

辨

陣しあやうもあつれあひ

本

牛徳き筆をたふ香

白

秋まうみ若きあつれあひ

新

秋雨さしあつれあひ

峡水

飽さるあつれあひ

化

侍勢をのり月ふれあひ

ト

棒えりきをたふ香

下

候きの法をたふ香

揚

居士とあつれあひ

辨

ゆきまじりあつれあひ

云

ゆきまじりあつれあひ

候

蝶酒旗のつらさをすむる哀
 子かこみよこい山崎小法師
 於ち終場を回向くこ
 袖挿し子れぬまはあはれ
 小海老爪白母とまきさむ
 悴さるるの髪とまきやうい
 於枝の結あひとりたうり
 切柳城卒於後とまきを松
 八重しの月とまきを揮く
 味嘴持よりまき源さねは
 位くおのくく森の小女
 妻あたる花副助の足入る
 枝杖子地とまきこころま
 二 湯たの殿とまきこころま
 我もまきをまき佛界と飛
 秦の代い隨の何と我ひ
 杯におまきこころま
 春のゆく端端のまき湯ま
 故れまき纏ふ血とまきむん
 於ち終場を回向くこ

樹のつらさをすむる哀
 白鷺の唐平権を買とま
 陸奥まきこころま
 嵐史破たまきこころま
 控の控とまきこころま
 末れまきこころま
 猫口とまきこころま
 二 湯たの殿とまきこころま
 我もまきをまき佛界と飛
 秦の代い隨の何と我ひ
 杯におまきこころま
 春のゆく端端のまき湯ま
 故れまき纏ふ血とまきむん
 於ち終場を回向くこ

三 齒牙の又荒く襟此名 角
 三 寸手ウの月は平良なうじ 吹
 雪のれくろひ雪を吹つく 尺
 小舎れ素衣のけ子もあはら 子
 袴の溜ね河のくく付 似
 髪入玉雀の籠雪の佃 眺
 目と影千くつ不二の極上 瓦
 松葉の粗文若上下に出雲 樹
 城多々々 雲の密柑地志 片葉
 戒十小大何そ共銀生ま 吹水
 膝小刀の吼ぬけてり 吹
 若旅本や世持の粗工を打て 角
 かすすの衣地よくし 巻
 橋上れ暮るは鐘を振る 葉
 西瓜いーくはぬ断ん 子
 三 ちりくくくまきとれ南島の松 吹
 月ち茶地れ古きよとる 樹
 道せのトそ小妻子と歌そ 弱
 つき平の耳に結る下し系 吹
 歩千ふくもくつん人 枝落 角

百世の家り入て後切 葉
 是は手先祖の楯の火地鏡 昨
 時ふくは来りける 菌 子
 雨と穿て板下の村お聞か 巻
 藝屋小翁うきよなふさ 吹
 夜翠子のえ少の響りおき 樹
 雪少なき茶や花の端つき 角
 津池漕屋後の後者志けり 吹
 葉りくくあふあふ到の美 眺
 張君のあしりおとろき 樹
 世に情 人 秋 の 碑 系
 月の向う山寺とのと柳沢 角
 石如くこれ松の葉吹く 巻
 帯木の蔭まの紙りた巻れ 子
 こそとくけ巻色の玉 吹
 袖入 袴 髪と髪うき 瓦
 後れ玉河りのうき巻く 樹
 我軍り純たる胸の中あし 昨
 胸思君 境所し 角
 肩と踏て後丹とりに 吹

翼よその津遊 隔以塙志 春
 無火と刀よりけくまふ山 春
 浪の井積よかくす為人 子
 物ほふ鹽とあせくきほほは 使
 燈つく白比ごほくしきり 時
 市燈はあひしとあふ木陰よ 使
 月傘さす子と煙と男と 兼
 舌群めて水あまきけのさり 唯
 夜とも思す燈極灯 老
 花の枝く遊人けり海して 春
 ハをくくあ飛り小毛物 角
 いスツクや豆燈よあて為れ紫 菊
 山とあけりし極此下あ 椿
 子水桶を元度袖けりもて 一
 こぬのみくくくゆの冬れ 菊
 阿ふ付ハ餅よあふら雲は 一
 指よさたつて峰の松ら 風
 物見け岩柁の床れき風 一
 おりゆとふくああを浪 菊

茶中さるき袖よりゆか風を 一
 何と折号さるの何け不の 菊
 五十志あふりしきぬくのみ 菊
 ひよむくまきと終流よまき 菊
 燈籠よあふりしけれも姫君 菊
 音相あふりしけれも姫君 菊
 小秋の百思をさめいなる信とに 菊
 てもひれあふりしきぬくのみ 菊
 風白ふ七使あま信くして 菊
 房吹捲る何とれ夕あ 菊
 唐巻け秋や秋より唐人 菊
 ろく毛やうまき山けりあ月 菊
 衣のまき柄影よあふる雲陰 菊
 兼もそくりにりあかきさり 一
 子まき板れ破るうまきあまき 菊
 氣の吹をえあふりる 菊
 米信あまきさくまきあまき 菊
 伊りうまきあまきあまき 菊
 送り信をすくまきあまき 菊
 兼信あまきさくまきあまき 菊

親父返さしては游へない
 さ終ハ友へけ復年へちま
 秋やや赤然若親娘は夢
 子危さむし一毒の下も
 月より美樽の酒もよま
 怪しいも静く静ありおと
 毒料とあやうも返すちと
 四甲の静うたる年角の
 又返せのや心をとれて
 ねのふくりり下帯も
 ますぬり履歩波の子
 遊の静白の根のわの
 破小舟別あしけてる
 木独りかゝる志砂泥の
 まるや下た薬草を
 かつしこぬの本名ふれ
 味さすくきとさ
 こませのくくき
 たりく
 時はあはれと

花よりいさ
 さの甲橋
 海
 舟
 夜
 夕日
 小舟
 いろ
 上
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二

閑閑八五使取子火砂持
 忠戸子かろく日女形蛇
 つらうん思此月多りの神
 おりひれけつるをそんを焦
 美乃元先まこくみんをまじ
 後書抄やお徳ろつゆ
 彦右渡りくしく油の舟
 孫千んそん子美本の灰
 花紅紫のききしと押して
 葛籠一為りた先を
 古郷への裁付先をゆゆ見
 津の帯もきりし獅子舞
 笛の音ゆりし風を舞う
 義経見少く雪れゆき
 玉子酒にけし法と打子し
 冷も若くぬ大温のあこ
 初年持護し後吉はまはて
 初春のこむ秋意の芳露
 お座より母へそそ弁し
 し女のすくく白腰の帯
 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今

吳服物後後徳氏のもれおひ
 石山寺より妙るうらまき
 夕なをわゆお燭飛雪
 是彼岸の浪をたまた
 六波中を渡りし橋をえて
 一かき 虫換 子万 今
 若もあはれや 虫換 美れや
 さくしく荒し折の富れ
 物なりけ来すく東を打て
 一分りいらしお揚まきく
 おきてお新よむい花し
 ちやらのくろり山里はま
 尺波せらぬれはる夜人の森
 柱の帆ちしち十ふれ月 四友
 さるきふあみまこくし春
 山の砂りあしむもあ
 名作し若て東よゆと人あ
 うけくまろりし日備大将

備よき御報意保持せしるゝ
 おいもくけし味もして
 隠居といかりしき知もみ
 おし経さすし相ありあむ
 重抄るお拂ふも文紙の秋
 みうし終由るお度百日月
 本職新山をうじろよと袴
 湯の枝の本をみ麻衣
 方と夢を何ぞうみて写寫
 衆尺のうそを吹森六木うじ
 楊梅をき後の柱のたをみ
 七者此とき思つて何の事
 信事すもみれの持せしるゝ
 孫子のころと書しす
 花の真と渡山をうじ
 宗盛れころよきもふ金
 白砂の持しすくし沙雪
 ふぐと形端よ何やあまに
 寺のゆえに定家西のほと
 貴之の後のみよの月

八百身沙焼は光をきて
 裡れころやうめ来寺の秋
 根や香れ衣なりぬる染
 被^カ等く信心う 衣
 一燈燭光り沙じ右刀の秋
 衣立れく彼の池を備
 そいもやすう切果て飛雪
 笑れ他をそかひ竹の一村
 紐を換くゆじ後守りの
 おの終る袖の火の切あり
 立^ニさうく事長持おしやれ
 いさやういんどうも物もほ
 縁の敷き蓋後しりも後物
 正^カ我勝と双六りうり
 おりしうかごか解世をさ
 親れれ悦はゆききく世
 兼小段の物あり雲はほり
 つさう水結の目押ふす入
 管器と木櫃の舞やあらん
 雲を花い何れとも毛をあは

鶴は骨のくもあつて里は月
 又あけの影一丸山の色
 には基盤をたて東苑うて
 うすみの方より橋を架すた
 三 立基や系林竹のちう工
 殺引御半きを始しく
 法信中をあらうきたのふ菜
 法しく兵 徳 大 根
 昔重宿先をけんちか行所
 常りのふ未本葉世代ゆきま
 因果の支秤は血をすまふん
 善男善女四とたせゆひ
 又又孔子字は太二郎
 時子何そ子の為を若葉
 不心中毒すすうて何せん
 君の嘆笛我かてつる
 志の霧の取にけうるま月
 秋を過さぬ中け舞は
 三 寂滅の貝をささる神楽
 石ころめある山中の雲

大地表ついで能やの月
 長十丈の餘さうりりや
 かまわらる橋板まうる腹く
 魚舟 傲甲より糸包丁
 ぬ能板や少し出れは鹽の
 粉糖を付れり時高ゆきん
 六雁の伊約の山にやまん
 河内をまぬとくは秋風
 さうれは飯匙を付く物考
 魚を揚げて物こうり月
 種字をた姿急死もか
 三 妻すより西瓜のし
 新色の煙糸かうるま
 代ハ車 序考めつるし
 何云する信の与に舟大綱を
 たしけねひけり時年
 口舌ふハ忠後羽て休らる
 弓子ののたより赤い少ん
 道をたつたやまののん
 志を別と粒つるの心

倉下獨行桑敷赤のぼろり 去
 穢那渡ふる奈木田丸 去
 沖一ツ番民これと雲撃す 去
 けんといひ若葉を山の端にぞ 去
 小半代赤子帰る月七月 去
 屈平侍む執子の言 去
 雪風も山花籠ふかたれり 去
 かろくは天下地を以て 去
 信いふ若葉を人形はかき 去
 海士の舟もくしん形のこゝに 去
 海をう斬若火はあつて控 去
 八重堂磨きこりぬ去 去
 面影のおろし大根を以て 去
 あうり侍子よあすは秋の月 去

於四友亭ノ興リ

次を秋志賀志賀良休を以て 去
 予のくの浦くくく人て月 四友
 仲れん玉をう袖の芳を以て 去
 是きくくくくくくくくく 去

山若く小栗のうけよさらん 去
 あくやうらきききききぬ 去
 甜湯美麻子すききききき 去
 柿をききききききききき 去
 ぬす人と三益の妻や侍やん 去
 大角の町もくくくくく 去
 子龍のや公依り列く 去
 市宿志きき白雲の神 去
 至以巾籠ふたむきききき 去
 洲寄れねのひよりね 去
 てくくくくくくくくく 去
 庭れ糸をり横がよらん 去
 又やあきほ屋門あつた 去
 南於四百八十目 去
 若野山もくくくくく 去
 浪守守若をききききき 去
 花の庭月の花を袖の付く 去
 雪折れくくくくく 去
 血れこききききききき 去
 胸のくありくくくく 去

於のさすの何とふ我思
 時ふれ松の針まよとよ
 おまほよふ中つりあふ
 森まけ月まいつくまに
 燈亡や之どくま秋の
 芦れ花をよつりあふ
 浦子をまゐれて海のと
 さく出の波に竹あはれや
 甲斐久宿や浪泳の藤まよ
 日土人れ乾てくはあ
 風煙の火りぬるふ小炊
 針代の風すくく驚く
 西ぬれぬ萩原よの勢
 風すり房のぬるふあ
 お使よけとも秋の果れま
 二万月くあく久節の香
 宿れ月すくや朝とくす
 殿すくく系れ金歌
 ちやましくますの志とえ
 くのち小城ま男あふら

冷食を鬼一ひり管たり
 是生滅法は甚極
 於悩れ甚まき中て翻
 冥きく中て一ひり我
 口惜の死れ勢やぬく
 あくまてして物あふ
 三ひんま熱笑止ま
 あくまてして物あふ
 物情はあつて存よ
 根さくまてれり
 老嬰のあつて存よ
 美らりひり他を
 幾月れぬれま
 一人と思根れ
 紙清よりぬれま
 けり上情を移て
 愚直の殺ま
 平引く月く甲の
 布とく天の
 帝をいへるま

秋の風波の浪は田川 石
山は波のうたがふる 美
浮世のあはれをわきま 石
月影のながしき境 石
幻の都に花のうたは 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石

物ねえのたのしみ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石

物ねえのたのしみ 石
あまのこころのすずめ 石
あまのこころのすずめ 石

子人力の事也... 法
 無つらむむ... 法
 多たると... 法
 其の養生の中... 法
 尾花の袖... 法
 或ん... 法
 支い山... 法
 一念の禪... 法
 かくらひ鬼... 法
 我ふのり... 法
 祢のい... 法
 麗る... 法
 後... 法
 骨... 法
 立... 法
 多... 法
 本... 法
 花... 法
 狗... 法
 二... 法

即高ゆ... 法
 釋迦... 法
 八百... 法
 釋迦... 法
 凡... 法
 川... 法
 二... 法
 東... 法
 其... 法
 彼... 法
 去... 法
 谷... 法
 其... 法
 吹... 法
 秋... 法
 中... 法
 慈... 法
 其... 法
 本... 法

翁付四
 廿一

ひんちやう神の社忍りきり
 出雲守てきり神の又家宗
 ねねの浦代お若の傳
 ぬり桶と徳のこをつみかへ
 平目白くくむくれ名親
 ちあゝん龍の如の踊りあ
 又大匠れ重つふすま
 三 ちさきやナニひとのうま
 及れ中よりき山の月
 小買者の書とられ又宿はま
 云俊の七筋ひくく時を教
 關西の佛ふまよりま家
 火付の書とく終めくん
 本之位續子と述くくくは
 貞の第や 飯おくま
 かくくり難波の梅は足
 貴之うま竹虫の表
 そ終のとく陶の書おをて
 温徳きり存す橋のよ
 約あふ中ねの障子ひは
 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

急のやろくさ終りまより
 買かろま終ぬ名を付ひて
 三 じり大ませ山のゆ一
 ね家は之終四所まを所終の
 地獄やうやま終やうや
 小物ぬきぬの終れたまむま
 懐きま日終ぬ終
 子子終まてゆりま終
 終れ又ま一分のゆま終
 抗のかまらま終の月
 終やむり二代月終終
 まらひ版帯終ま終
 知の終終終ま終
 形一欠の版人終ま甘草
 妻あま書をひきまらま終
 終るひかけてまのひまら
 良きけく下まらまの終ひま
 赤あまらまの糖まらま
 酒桶まらまの二百志終まら
 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

借以ハ人々宛々
 者よりす事世れてまもり
 君こしく凡の先ちと思ひぬ
 志弱く内親まれば清く紫
 乳母さんあしと思ふまの精
 疮瘡の疥鬼神ありとも雲月
 ましとや面を洗費のあ
 菊子布れたる髪をひるま
 ねまへく代の事感在中つ
 火雷たらしを清くひく人
 若魚おと本所此末
 江戸此系近新の東の村と名
 白きまおとらううぬま
 さそれが清濁瑞おまの衣の衣
 身すまをくまにきか人形

美の面受ふ山よりまえんて
 かましくけの勝の先人のむけ
 赤らうら若くは此世の舟
 乃よ子をまらうは商友と名
 五丁はさひさ月こまをう
 ねと煙抄り乳垂の秋
 子けのめのお取のやうは
 思ひのきりあまをうら
 門けりくことたぐ出せ
 種田度進退むきとたの
 二人の若れ浪人小姓
 昨よりちきれうもひか
 けけやつけ残りの母
 心若あのをさの海くま
 浪せきくく文金の圃
 若陸は地獄の度くさ
 鉄板鯉の而白を碑
 酒は月後兼舟の市振
 障の内後おまみ

肩と取袖さきさき死せ 侍
 世々もその世帯おさう 為
 福は尻入江のはしききとて 守
 の川をふらしと野火吹く 山
 山をけし難逃居て社の守 新
 之十三手放たてて産 守
 手性や後成水の女をけく 侍
 手手性けし小傍新設を 為
 いろは顔枯立山もあつら 主
 ろをと増補し時雨降秋 侍
 彩ひくろ月夜のまねあ 為
 手おれまのおさく捨取 守
 手早かき世をたか懸かた 侍
 手い子の母縁のぬけを 為
 手多とんくらのまこと火水 守
 手鬼と成て流のハをま 侍
 手こら虫置れくらのけり 為
 手これままを世と成て 守
 手おん池東敷山はたやき 侍
 手花のさうりし所中をま 為

手木の髪ゆひしくやい 守
 手基よ出るゆきうくひす 侍
 手うしよと奥くひ乃世帯 為
 手老きうり助し宙の夕くら 守
 手意の虫子を糸海を打ちけ 侍
 手非世帯使知の玉守 為
 手心中コ山林竹木踏き 守
 手末世の産乃菩提 侍
 手十材の世帯のい言秋あて 為
 手海地いこうさ中はやまき 守
 手運の糸世帯の店の如事し 侍
 手ころふりのころ暖簾のま 為
 手恵の團あふおんく人おつら 守
 手首つけの思ひ情てま 侍
 手うき中ハト集もつれて弱く 為
 手あくの書り森汗かろ 守
 手志多し赤大衆意のまおま 侍
 手鞠る傍山庭入の山 為
 手善充うさす筑紫のいさち守 侍
 手かろすすのこや右近あん 侍

肩と取袖とささくさるる死也 法

世の如くもとい世尊持する 為

縮れ尻入江のはしと等と信て 手

の川をふさしと野れ鳴く人 法

山あけし精進房て社の有 難

之十三手放たてて座 坐

再姓や後成ゆの女をみる 法

字うきけしゆ小傍新設云 難

いろは顔枯立山もあふり 坐

をうと増補し時而淨秋 法

彩ひくろく長月法の意相あ 難

みれまの取まゝし給て取 坐

や早かゝる世とたは懸隔あは 法

...

草舟月橋の影ゆきと影て 為
 すりし山り 意皆成併 字
 足性の眼の光り 湯の所 法
 舞臺の光り 因果すまもら 為
 志心やとまふひとりの世ふの 字
 あきくうのうとて 十貫目録 法
 大八やあひの車の思ふ人 為
 月影とめし 文彦の者 字
 山花の柿禪 一尻けけ 法
 青葉の目白羽打き 思 為
 青葉の本宿 けらみやあきん 字
 山言く 湯舟 湯舟ををし 為
 湯舟のうらう 舞るうら 為
 白あふ 一花の雪足 信徳き 法
 魁匠中 二約い 一とま 為
 態板も 中子 女引きて 為
 山すく 山や 三玉の九部介 法
 舞も 中 寄 寄 寄 寄 寄 寄
 松竹 茂く 沼 浅とく 字

衣物の色 意 紫 五 六 五 法
 楚玉のかさ ところ 横町の秋 為
 那那の里 礼 新 月 明て 字
 よくし おも 六 會 雨 と 赤る 法
 子 あり 十 万 後 子 鼻 の 先 為
 子 あり 十 万 後 子 鼻 の 先 字
 音 楽 の 小 弓 三 味 線 あり の 山 法
 四 竹 さ かく 竹 の 於 法 為
 市 街 の 湯 池 は 五 尼 の の とも 字
 及 家 そ ず ところ の 伴 を 中 け 法
 ゆ づ け 英 妻 け 膚 ち ち や ら ぬ 為
 小 糖 み り きた 華 袋 あり 字
 揺 栲 油 く ところ や き ところ 人 法
 鶴 て 飯 の ち き け り 焼 くる 為
 ところ ゆ き ところ け の う ず 情 字
 志 理 の 若 け の う ず 情 法
 美 や 花 白 赤 毛 ち 焼 等 二 為
 花 ち ち 掃 くる 羽 帚 の 為 為
 何 何 ち ち 掃 くる 羽 帚 の 為 為

幸ささきつて是れ先ずく 松葉
 吾今ぬきゆく種はまや丸すん 住住
 拙者 名字ハ竹の藤原 為
 お煮の巾用もゆゑははの鳥 幸
 海方さこすし中おれははは 住
 醤油の塩をゆゑはは月すまて 為
 更てあはしく小使のあ 幸
 少耳やよそよあやき秋の幸 住
 種波の若ハ伊勢はよもち 為
 舟きりあまききききききき 幸
 かいそ小おや袖はははは 住
 物博しあやらぬあさきき 為
 干糖四五粒とねきききき 幸
 寺の月のおもひ種はははは 住
 みききききききききききき 為
 糖打のりりりりりりりりり 幸
 あら種つき種波の切は 住
 塩つきあたまも秋はははは 為
 手一休りアせまやの月 幸
 花の心は種波とゆゑははは 住

竹のやまあけの岸の山吹 為
 下り野川をもしきききききき 幸
 残浦より影雪おゆく 住
 風まぐ楊枝百ち別るん 為
 神部橋の紋はくうり鳥 幸
 双六の善薩もく小作違ふ 住
 流生の種をすくひららや 為
 月のあま高田を登はははは 幸
 わりんはははははははははは 住
 小蒲園は大地のうみ種取 為
 旗の飯棧場とありし中 幸
 一二粒ははははははははは 住
 月ハびうしは親に友とち 為
 菴を学ぬひひききききき 幸
 胸算用のすきききききき 住
 携厚もすの秋ははははは 為
 我くあまきききききききき 幸
 ゆゑを無て石魂急飛子とち 住
 古の地はの芽系とけり 為
 塩をせれんききききききき 幸

文正子と忠海まゝなん 法
 今日より新報と出まき 為
 物とありはしむのおりとや 幸
 何と何と二秋と追てきて 法
 月影や夜更の琥珀と見とん 幸
 隠元とありまゝのまゝの 法
 法のまゝのまゝのまゝの 為
 名はれはるもつとつとゆく 幸
 上中の裁れまゝのまゝの 法
 一百歩石の橋ははらなり 為
 守随極の奇の撰集 法
 掛もも小町とありといま 為
 小松の杉木の枝とてまゝ 幸
 ふる入をいふまゝなり 法
 海もや辺の法まゝの山 為
 さる紫人のまゝの紫まゝ 法
 滝もまゝのまゝのまゝの 為

これそ石敷のまゝのまゝ 幸
 花のまゝのまゝのまゝ 法
 虫のまゝのまゝのまゝ 為
 二粒のまゝのまゝのまゝ 幸
 三粒のまゝのまゝのまゝ 法
 葉代のまゝのまゝのまゝ 為
 質のまゝのまゝのまゝ 幸
 四子のまゝのまゝのまゝ 法
 五子のまゝのまゝのまゝ 為
 六子のまゝのまゝのまゝ 幸
 七子のまゝのまゝのまゝ 法
 八子のまゝのまゝのまゝ 為
 九子のまゝのまゝのまゝ 幸
 十子のまゝのまゝのまゝ 法
 十一子のまゝのまゝのまゝ 為
 十二子のまゝのまゝのまゝ 幸
 十三子のまゝのまゝのまゝ 法
 十四子のまゝのまゝのまゝ 為
 十五子のまゝのまゝのまゝ 幸
 十六子のまゝのまゝのまゝ 法
 十七子のまゝのまゝのまゝ 為
 十八子のまゝのまゝのまゝ 幸
 十九子のまゝのまゝのまゝ 法
 二十子のまゝのまゝのまゝ 為

出天と来て海軍のいぬす
 せ総士の橋の上より岸さ
 那々其勢万日まわて
 証又証母も亦まや老と
 彼とつゝきま難免とく
 末信はと結く肩よりけ
 未貸は夕燈入り三郎
 韋法夫も待しゆふ子花所
 出せやかせとせむる川舟
 一しやむ追子魚を波角
 一しは昔くつ芦の穂れ
 中の法帳前よすこけ石
 本後子の尻山の端のや
 人形の嶽の下りの河じ
 一しはけよかふる芝花満き
 一しはるるをさするるを花を
 一しは一しは白波うの海
 一しはは信がひよはたのまを
 非代の来お出入のま

梅の如く他は少くさく人あり
 ころとつづつ所もは時のま
 さやらんすまあはまの物
 けんやとまぬ心のよけき
 志てらん中はたさむす
 うこの地のちよけりて
 海にたて筆は筆も月を
 趣向しつゝ船の影を
 いふは徳義をえらう秋
 冥子と用い物まの相
 うつ様もよめ山まきひ
 まき花もあひひとまき
 おれれ木のるれたまを
 羨撫撫きまう材角の
 夕ゆりはひきゆるを
 ね子のすりこ山の端
 寓きれむりの為葉の
 相きあふ木も志はら
 松の香くありありす
 釘まふ外こけし
 学

古田のあふりつひはあはれおきて
 志賀山のまふいこふ風
 さうあみや二花う袖まきえま
 何うくさばふあゝ東の未
 わる後小池のうらみおひつ
 玉子のあやうらこころ晩
 侍侍 唐のうらみかすまら
 上碧のあやうらこころ晩
 付とけあはれひよるの智
 秋のあやうらこころ晩
 世中よふま名あはれいんあ
 相いみとらうけの取縁
 古野の横馬を引物あ
 火神をさやうああつて
 うひのあふりつひはあはれおきて
 何き子のつけを杖とせむ
 うらみかすまら
 地獄のあはれおひつひはあはれ
 飛雪あはれおひつひはあはれ
 焦るいさぎおひつひはあはれ

福祿とらぬ事やまきまきん
 鬼いたちやちや下りあはれ
 老若のほれほれのし使下
 白むくまてあま五十年
 田舎もほれほれおひつひはあはれ
 めるいさぎもあまの秋風
 産の海船解人の望の月
 虎の毛ころもわらわらあ
 くら子の薬地の扇おひつひはあはれ
 子りえあはれあまの虫くも
 ねのすみ徐福のあまのまき
 手川あひつひはあはれおひつひはあはれ
 隙のあまを掃除とやあま
 糸方天小籠さしおひつひはあはれ
 糸方天小籠さしおひつひはあはれ
 その秋の不二の山
 可い赤房なすつてあま
 足よく成件もさあま
 雛の赤房なすつてあま
 竜田の紅紫豆腐四五丁

古里のふるうひはあつたて
 志賀の山のまふいこふん
 ぐらあみや二宿うゆまきえま
 何うしてはふあゝ東の末
 あら後小池のうさかたら
 玉子のあやうらうてん
 侍守 宿のまきんかすま
 上 碧なるをとりたけ
 付とけふとひ子なるの智
 親をたふいのうれさーや
 世中よふを名ゆれい町人
 柳のみとらうけの取巻
 古里の横馬をいねあ
 火神をとやうあつて
 うひのあみやゆきまき
 何者子のつけを杖とせむ
 ぐらあみや二宿うゆまき
 地獄の文くさうし何れ
 飛空まうてつてもえさ
 焦る鳥のちぢ田のまじ

花

、

家

花

ま

花

家

花

ま

花

家

花

ま

花

家

、

花

家

花

家

むし時をなをさるひの二さり 字
 人死の患作さるくたり 海
 大太事とゆりあふさき並 字
 せりしとあつたおれ松山 一
 日本橋らんをちあて海軍に 海
 才く又せしを依那の原に 字
 かいつみさうら拵さるる 海
 海軍のつてせりさるり 字
 浪まを若りのあつた中に 海
 何とせねさすひてんゆん 字
 小舟と事とさるれ海軍 海
 海軍れとせりさるり 字
 物作保若白粉とせりさる 海
 軍家の秋と海軍 字
 かみさうし内侍もあはれ月 海
 のくまんせりさるり 字
 衣屋も改め海軍のつて 海
 かののつと拵とあはれ海 海
 岩橋やさんとせりさるり 字
 天よりつとぬくおのつと 海

その四隅を口へり本を校して 字
 日備のれと海軍おさむる 海
 獨り都事とあはれ 字
 慈心の上よりさるる海軍 海
 人として思ひさるりや親の云 字
 死よりつとせりさるり 海
 いまのれと海軍のつて 字
 幸ねれとせりさるり 海
 物より海軍のつて 字
 さるる海軍とせりさるり 海
 名れ海軍とせりさるり 字
 後海軍のつて 海
 上り海軍とせりさるり 字
 大板の積とせりさるり 海
 海軍のつて 海
 南軍のつて 海
 紫れ海軍とせりさるり 海
 とつと海軍とせりさるり 海
 軍のつて 海
 海軍のつて 海

此梅よは七絶書と傳つて一絶
 ましとや佳人百万此非竹竿
 春高の將く志やれる世此世に
 那味香す一やの神意の下枝 梅
 招神とよみ紫れすうころも
 むうしとて記の男阿りり 桑
 勝のひくけそ笑へる虫の月
 瓜わてふく阿一申の心 梅
 五寸ほくをたかきふれ乃 宇
 ひとふん阿さう伝うしの松 梅
 淡路島は形を好くをををを
 友よとてりれさうひ春を 梅
 春高のすまひ白雲の橙くえ 春
 森のちやうと茶茶六たう 梅
 古昔宋の事終て遠てあこり 春
 中阿すくふむさふいぬ 梅
 志は秋らたたえのるをよ 春
 吉祥天女もこれほは月 梅
 阿つて人の瑞踏うふ山から 春

松の阿くこれつくと身さか 梅
 大悪の成る花はやとうじく 春
 かすみりもろき天竺のきぬ 一 梅
 と竹の香を貞女とておとく 梅
 如退退を判る味重く 春
 脇の流れり一東進ひきん果て 梅
 うみあうれを教くくたし此中 宇
 地は阿く石印をくく阿ひて 梅
 末の松山筆使はれ水 春
 ふ夏の酒志やる柱て梅の隅 梅
 をを張さしてたててくく 春
 たまはりのおほくく阿の心 梅
 東風山くくく一柱阿り 春
 子星をうけりち在い阿れも 春
 阿の月をぬ去をこれれの世 梅
 ちんちん阿りし引とて今春 春
 阿の阿の中は阿末の春 梅
 人足り起るふ阿も阿り 春
 春高のたなき起て福縁く 梅

法名は小形うぐいすを以て
 死すとてすまふに歩みの所
 上野下野の畔に暮らせ
 浮目貫於れあそび朽果て
 権いなき形中々をとりれ
 ちのゆゑいやくと何のむすま
 由くとせは縁思も人数の月
 大母と直き子を就て取立て
 乙後の控への乳強は
 古も事も三方よりと習うる
 け山にけり隠居神やと
 三石二の嶽ひてくさむ割匠
 人完少のきともや楠の庭
 柳場や三角の枝の茂すふ
 山椒つらや柳椒ふらふん
 小松やさあぐらうりま
 甚かあやう下女のよむ書
 ちよひ海の二階かあむ書
 かくこも柳をさる砂の松
 とくあやむを柳の標つとく

終因は少きえれと死
 照つひてまはるきや佐つん
 けいさのらのもく眼あの日
 飢饉と一語りをもぬ秋の書
 多うくは傍をさ萩の上へ
 一葉つく柳の髪やまけぬん
 こ終りもあまうよふけあし
 雲宵れ方なきもねいあま
 時向降垂びう淨瑠璃
 おもねいあまうよふ山雲
 柳風や風をたのめあま
 君とくあまうよふ下野
 契りし秋を序書あまうり
 月すくも子履のそふ中絶
 河内のまふもあまう石
 四重まふもあまう海雲
 浪下り草垣はつらうり
 時を死入江の石中絶り
 やまうり一院松よあまう死
 いてまうり一院松よあまう死

徳を以て小政を以てしむるを以てす

事

然と云てすも其の此の所

事

上野下野の所は其の世

事

其目貫於此を以て朽果て

事

其の毛き其の中を以て其

事

その所を以て其の世を以て

事

そのことを以て其の世を以て

事

夫を以て其の世を以て其の世

事

乙後の世の世の世の世

事

其の世も三万たりと其の世

事

其の世も三万たりと其の世

事

三

事

七リニひくく入おのころキ
 茶湯之并の古古取めてキ
 荷させり終りまのうち紙キ
 階九の目より八月よりキ
 伝立の事置合有りキ
 殿より神丹中ゆきまのいりキ
 白梅屋の清きより終りキ
 つくしと向うたてる後山キ
 入部をい山野の終りキ
 思ふ終の紙のあまよふんキ
 何すし小梅の強のあまよふキ
 何人よまの月より出てキ
 古又ま交まきつする秋キ
 通のまをたをけ起して白雲キ
 も物たふしや人のこまよキ
 孫のようた枝の天東大回キ
 終せひんえて茶あふんキ
 秤して田中の初志やけぬんキ
 何し終の玉とつらぬれりキ
 花よりりて梅下の里六十園子キ

日坂この終の峰はさき山キ

六月二日東武控小石川具り

清しさの濃くさるる水まキ
 茶湯の事と人とする物月キ
 松竹のまをり新時あけりキ
 酒店の秋と傳子ゆり紙キ
 社日まふりる茶の味もやキ
 茶席作く我あまよふキ
 ちのたも今を候まあまキ
 種とたお終のやよひの離キ
 花とてこの伝ははたきキ
 あまよふとさるる水まキ

戸徳の山下小家の静ありキ

何雲架もてあまよふキ

笑顔とてまをり月徳の二巻キ

舟よりあふいのちあまキ

雨さるるの故あまよふキ

茶子茶の味もまよふキ

既中なる基もまよふキ

海乃多くお暇ともおらん 角
 晩稲刈千のちのけ月と月 九
 津瑞穂守ん宿うくむ秋 角
 桂の宮の懐もさうす都り 角
 うしろアせくささ婦如き 角
 花若く五日の月と月と月 角
 小東をまき丸山のま 角
 三尺の軒と小鼓と料理の音 角
 ともや悪好をぬくはひり 角
 幾回の戒ひまを先やん 角
 遊水やまを桂の宮の音 角
 白をぬくやうゆきは十日 角
 支那の醒のぬくはひり 角
 猿のすくみくさくさ美盛に 角
 ぞく息やの音と二羽う 角
 棧造りぬ猫の尾を指ぬ 九
 きぬくの夜をきくはひり 角
 今おれつうぬ人のさうや 角
 古林のせうたぬ血と月 角
 以ては考ぬる方小夜曲 角

引板と業とすすのこゆく 角
 武士ののすさやき儀ひ 角
 七甲は夢の七里秋の 角
 里との雷南けると化し 九
 櫛は小冬さうく縁と縁 角
 陰陽神の留ると後の飯屋 角
 相女とまきふ流ととある 角
 晴るるとさのまの打とる 角
 軒く味ふ出羽の餅 九
 冬月のとりのあけとまき 角
 松くぬしけつもの萩萩 角
 福来れまう起野とまき 九
 三里もす急す不二とまき 角
 若と都小弓はまきりまき 角
 まを熱ふる水の梅日 角
 陽おおすを梅庵く縁とる 角
 砥水まきうむる五所入を 角
 峠のふ上戸も縁とかく 角
 ちをらうくす風あけとまき 九
 伊勢すれ海船の扱ひとまき 角

入院又は病の長ふ致と家
 一陽を發正月をすり奉て
 汝様よりうりの暖すや
 深夜のゆりし朝日をおぼ
 志のよのみそ幾難りたひ
 うれせよらぬ川畔をうらめ
 名を何れ坂とてあふれ
 店は月夜に入尉安ら児
 かけてさひきまを幾夜来
 みの虫のねたつこれとぞん
 忠子死する家よりいひ
 御きの石凸凹ふく
 小女郎小主人大根曳以
 血をまぐ起信よすけい難
 かんよみの好の門い西むき
 浮海のうけおきよかの難
 汗流るりし憤る 羨
 ともうけしは旅者すまき
 ふらふらとさる小娘の才山
 枝死をむむる月のあはれ

巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九

婦とてうつらん何ううり
 猶しと修羅する舟のまき
 立ゆらぬ山の空をのろ
 きれたる乳人う綴り空を飛
 麻布は病をえはとまき
 わる業やうりはを折れて
 又治二毒のちううら
 みやれ幾候くいと物ん
 孫りかふらうらうら
 三日月の影西天に落ちて
 秋は月の光をけ控の林
 焼心とや人いふあり神
 只一服もさへ一す
 特れかきもさるうら
 它あうらうら控む冬これ
 他くは病を八もさるうら
 桶の輸入の控むやしく
 ひらきを種まきさるうら
 池を控ぬ不動なき
 春あてさるうらうら

巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九
 巻 九

歩る日と共て四寸静あり 丸
花源の家と通て人やいん 石
さうくくくの奥はき園 葉

蓮池の中も藤花をすせり 茂文
み草のうつくたゆりかた子 菊子
さうおやうと大もかきおて 菊
肝のつづく月れ大きき 越人
新管をさつけ人の通るほど 性然
藤折小家の昼いさひき 炊五
ま秋あく畑いさよちと 為村
櫻のつねのやれよ免あり 慈堂
古され瓦少きく折中折く 己百
萩くしちきく益人の家 梅川
藤より高きあのりて義地り 香殿
るれ葉くく舟のせはさき 時吉
吹たぬるや結すほど小高き折 拾系
葉のひらぬるお子ちひさし 用五
遠生の植根は機とせりけて 東巡

出ぬけの社又のきんとうき 石
足湯は未だにやれていさくし 人
つるけく舟のまぬの月 文
秋のゆき橋たつくも子 芥庸 子
ソコの手をうけて香かすすも 然
花よりくまらむ山にきり 玉
侍のつらみ侍うすむむ 提
二 ち探り冠あつては 餅
遊ゆけし菊は夕日まらぬき 虫
みくもむの朴の梢は蝶のあつ 百
弁南ははははあつり 石
淑者もより行はせぬゆの松 只
荷をすちうけてる士のいさひ 京
ち折つて燃かかたはけあら 出
ゆえあさる大いさけき 巡
もこの目い内すも名の値をいせ 文
琴かかすひ折る橋はあつら 笠
物あはせ捕まへる物あはひ 然
おるるうの折はくもきまら 人
子親おるる折はけいひさ 石

中より此の月よきあはれをせ 玉
 ニウ 以里の如きる若れさうしと 百
 孝子密柑を折つてゆく 呂
 志らぬ川人の波を待たせ 京
 信弘の傳ふ人神はとくさ 巡
 去らに此所山をやり崩し 笠
 月のくひする松とときなり 文
 おほひあき佛を考れと申さる 然
 けやあうてさうさる反橋 歩
 去産おと折らば千は忠真 持
 他ひきまのあをけつうく 人
 やくあうさうさう人の衣けて 病
 片隔子あくる月の多けき 持
 本枝に記らる庭の笛披 弓
 惟伝とつむむおれのお 雄
 密柑色
 松のくま新海とさす歌をさ 志考
 月もかゝるくろ垣の上 積持
 所の門おつてさゝの飛こえて 海

恙てい候ぬの能を引する 雲
 廿日ともあつてすまひうつと 性然
 こは山ありて子親中つ 貞盛
 藤おろす子後元はきれうを 世華
 床て天をささくともくと別 考
 志平の梅はの袴を子小提て 性
 堂崎れおをさほ引のけ 蓮
 は合と交橋れ舟とのあな 翁
 阿かけと藤のあふれうのつ 翠
 せうくいとほ子と籠つつき花 盛
 大工屋根屋の師をささ 存
 月のあつてあつてさ 教 楠 考
 白の海日れさるやゆさやう 芝
 きい葉を並直しても同く 衆
 親とのふさ子をうらそへく 秋 考
 月影よ又うらえす 素 玄 仏 翠
 かうさ 藤 巻 の 波 の ひ や か 地
 吹 死 二 毎 年 斬 す 連 二 ち 然
 物 寄 二 さ け 二 つ 二 き 梅 柳 二 盛
 昔と折れたるもの終りおて 芝

内家の苗より子孫傳へる 考
 是場の門のさへ入らざる 考
 一里の舟も後のすきさ 考
 山いづれ密林此の美事 考
 日あ終てあくる相れあふ 考
 母あまふれて月は物佛し 考
 氣のなれりまき業此中 考
 侍者の髪を結ゆ入梅のち 考
 さくれ出をほと海いあむと 考
 小舎とむむひ合をた下の昇 考
 せんとの物ふ人死にあふ 考
 あらうは子日ちれ密くあて 考
 とうけ是地の雷ふ押る 考
 洲い今ふすまよるあ智知 考
 加減れ業志のさうとのむ 考
 流れまやううとれいあや 考
 こけ終てける野のむけし 考
 物々の葉のゆもろと危の業 考
 細い次舟りよはの流やく 考
 枯もせふふとともさき梅枝 考

月見よのりも遠州せうや 考
 ぢもゆうしとす秋の風 考
 溪の小あとりさきりあ 考
 懐くあましととくとけ状 考
 いそまきれ舟り白豆腐あふ 考
 雪隠のさきより歌く死の枝 考
 根無つてひこうとひすのゆ 考
 ぬれてゆくもさやあれ茶 考
 是うこれとすたかく 考
 月入るとはあもあはねあて 考
 子ぬかしてはとすちちひと 考
 松のうも森のまはかひあて 考
 雲あふしてはれ一はま 考
 日と流るるゆかの路の端ち 考
 下戸もたむそちもき酒樽 考
 びく雨のせき障もあまれち 考
 是れ流るる木かしくちや 考
 晩涼不物のあも噂ちや 考

妾とすむる実輿の船 枝
 肌のきぬ女のかわりともあり 生
 久ぬすち終て秋うつるを 舟
 よもつらふ本より鳴出は聲 枝
 のみありよる燈のあすけり 良
 吉ふ位へ非れ枝も只四半 舟
 船あきゆる津のあきつる 生
 枝のすくく虫のさの煙のき 良
 むうとをさる月れゆ陸 枝
 枝のうらたよ末橋里ちり死 生
 離愛病たありのりり 舟
 蝶の羽や布き枝は程あ見 枝
 ともれはよるをたはるはつき 良
 じきさある本意を分角れて 舟
 月鏡して見てす又後月 生
 それ志とぬす人のる沙お 良
 志のふみくらす人の有枝 枝
 妙社の根枝空生れくかえ 生
 病いの志てありく知志 舟
 てひいむくいひむむ枝 枝

少やぐ中風秋の戸障子 良
 体さく心も狭き故障子 舟
 のみさるあどまへおさる 生
 入のれいへくはるはる 良
 ちありさくしき枝の足 枝
 志もつた跡なき枝一ツ 生
 甲ハ舞中かかく枝て 舟
 遊刺の旗とあり以秋の葉 枝
 月小起臥乞食の楽 良
 ときおれ基とつておれ 舟
 筆の墨もくかたもるむれり 生
 形もてあつてと打食ま 良
 汗のちさるは枝 枝
 丸丸の門より不二はるく 生
 袖のくちも枝あつけき 舟
 毛せくは文君の恩返し 枝
 然る袴へやまるとも 良
 初死を著茶ゆは枝 舟
 海よりいさめる若れ 生

變やきとすきぬく義月 國
 々つとけも指の巻いもの 拙歌
 層ふむ人なき里も安く拙く 守我
 かろう牡丹の名と度ゆり 去芳
 然くは方すもこれ上りぬる 良品
 龜の角とけすす群く 風去
 本より其前夜の精とひ首は 石
 袖かみある長袖監う義 本白
 るの精すくてもけ梅花 歌
 おとせと出すは連繩のけ 肥力
 伊勢の海より素淡とすき ま
 かしたの首と膝る古々 吟
 村人ハ舞のむりうこなむ 共
 轉江門流とすりりり何 水
 造る物と手の手の酒も甘に不 粥
 月も名跡のふいなきゆし 力
 妹ありや海に穂粟の生後 心
 少み出らし手冠の色慈樂 麦
 不登くの果はむむとぼぼ 瓶

物 ちりりり 牌次のを 芽
 此世に遊とのちもせまか 白
 肩に抱ぬる竹たきまこい 歌
 二 柳る雪留り不尺せむ里かれ 吟
 ちあれてたのたれと遊来る 麦
 華礼にちあるるもるのむあり 水
 女 嘆すら 啼れ戸の内 芽
 後ねのいのと天候とれきと 花
 宵中ちの多くかから赤なる 白
 志れとる藤は巾着たりぬき 歌
 子とのひうえんを積津の魚 力
 赤よ丸とこれくおけしけりて 白
 赤いこあろしや跡く豊 粥
 七々こあまとかしと懐かき 風
 赤うりて赤いゆきさる花月 花
 柿は本の枝もたえは実をた 麦
 飛てすもこ平し名や紅紫香 芽
 二ウ 峰の老の海鳴とひくも海松 歌
 水中の星とつとむ村の 白
 赤の爪あうとまきつらん 粥

ねい一山の秋く
 乞食もておまをすま摩着
 終るく途そ悔ひて
 其あしやろく破れおひて
 思えぬすれ歎きをうつ
 以て大を替おひて
 家のめしうきては色は忘
 引るく高蒲の海子そひ
 月日は時武くくふを言
 きぬくおく恋のさう
 力 海 舟 白 水

續虚栗

旅人と我をまれんとの言
 中くゆんをを宿くおして
 時勢の心ほと世のたれきた
 根をふくく山陰の鶴
 かけあやぐま生れあひの
 彩らしお見月よ終るや
 中のか画工一はれ停るく
 魚 仙 花

鏡としておくる鏡
 外垣や波をひく波のひま
 露と毒とくれ君のおれ
 涙のふささとの道のり
 舟月の雲と替つくる
 縁はる神はくもり
 霧一面くのころ
 乃まのぬ里は花をかり
 月よやかん海影の巻人
 昔はよく白ひも
 かもをぬくを
 途中ふたて
 沖く船は
 之は
 白
 水
 化
 之
 白
 水
 化
 之
 白

今とあり人船の遠く楠^カ角
 起出てもあはれうん海のま
 初くぬ所寺をたのむるの
 葬や石をむ坂の目か^目水
 小細さひしき業字他らん
 名実のふとを価出さる
 法のふる果と妹よと
 善は美あり面白きまみ
 職かたして氏の大五
 所敷置か首次あらふ事考
 借くくうく強くさた枝
 又くくくくくくくくく
 博れりしき蜀をゆへる
 隠さぬやあみ世に安ん
 茂く出く海苔すふ次
 谷深き目くは世の本日の
 春くきくくくくくく
 志厚じき名や小松次茂也

志を又初て終つるも月
 海ふるさつひき秋の終る心
 小枝
 志の海戸をたぬ事考
 著ト
 志くもや皇統ありし中
 志生
 何れはのりし情一む後
 志格
 浪あきき版上あけらる
 志市
 雨は海崎の志とくしあふ
 志蓋
 志格くろ松よりたかふ大志
 志整
 志食起し物言せたる
 志良
 襟のゆきそへまはるる
 志
 志とよりむたやとく
 志
 志あはれすも乾く冬もなり
 志ト
 志と作れつるも難あり
 志枝
 侍のふかへきくくく
 志
 志ろ整およ末の世も
 志
 志少くは月すれ
 志
 志くくく
 志
 志も理の成や
 志
 志くくく
 志
 志くくく
 志

ぬるむ清み小波の意来 枝
 二 善美の捨捨揚ふ人まき 枝
 かくらふうりに煙をまき 市
 一 格よおれておむまき 枝
 秋のおおなく我肩のふろ 枝
 富ふくく七八の編のふらき 生
 患よくせくる電くくんむ 卜
 け手終り志の成る種枝 枝
 豊ふくくくくくくく 枝
 於院よりも楽を叫ぶる 枝
 ちるわのこ中れ社力ゆり 良
 周於て互の良の志れより 枝
 考さあくの清とのせけり 枝
 大りこお持くくくく 枝
 危よりえあふ町のあく 枝
 風送る波ついで清や 枝
 若るももりあふもり 卜
 古き久きあふももも 市
 あけの情よ舞や何ん 市
 志とあふもがくくく 市

ちるく香くてもまを友 枝
 学んたあも節まをまはり 良
 くくくくくくくく 枝

寄葉詩集

多動や粉糖けくく白の端 枝
 さけてくくくくくく 枝
 友をいふくくく 枝
 門くくくくくく 枝
 ちるく秋の自れくく 枝
 此一着を栗の清き頁 枝
 七十あるを懐く 枝
 こそくくくく 枝
 涼しくくくく 枝
 怪とくくく 枝
 葉原くくく 枝
 手目くくく 枝
 押括くくく 枝
 弦くくく 枝

田代中ふ塔の名の事評し
 一とすうとう 月影舟
 花の時祖父のめて友なりけり
 傷て来あすまはれ花舟
 花壇のまの結ばしつじ
 とうひつらう子れよとす花舟
 善い合せ指輪のころの最果
 坂の松れいとむ 霜先
 手よそそふは星燈に遊じし
 後て海のむめりものか
 中うくと板屋のあつるあ
 稲ぬとくの縄を海やる
 月見れの歌よ不是此出来か
 こと終てあひゆあひや
 飯と刺てもむころの付掛て
 仕付てあす算方の客
 田と棲らびふ辺の梅葉
 てもうありし雪の社心
 此中意為不通意句
 多故不端韻而終云

拾遺

舟室や人きくぬ市は梅 酒子
 酒とすう入あひの香 其角
 舟の英儀おひゆく後と 舟
 火とわく舟の星々きき 仙化
 海うとくねおひりき波舟 船
 かさくふねんすき一む 二舟
 ちの相平着うつじ終世 子
 舟の舟友は花舟舟て 舟
 う終いとれふいとと終ん 舟
 根うと終いとて終らう 化
 舟舟合の白とちきる歌 舟
 か後門のちれを樹の大まえん 舟
 舟舟あうら市系の舟舟 舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟 舟

船のすゝみと後、燈を乞
 ね、島や、たの、危と、海と、伏
 心、一、媚す、い、く、と、せ、の、旗
 四、の、時、を、ら、あ、ら、ま、け、ら、う、と
 ち、ら、仙、ひ、け、け、納、豆、き、き、き
 江、里、れ、を、登、れ、息、子、菊、入、て
 浮、家、あ、ひ、ひ、く、ら、手、難、を、登
 美、法、あ、ら、や、拾、舟、の、船、よ、ま、ひ
 あ、あ、れ、う、破、る、切、花、打、片
 月、入、く、電、抄、る、痛、す、と、く
 一、の、芳、を、荷、お、焼、来
 塚、の、下、母、き、う、う、む、秋、の、風
 邦、一、と、軍、ふ、と、う、れ、ゆ、き、き
 死、の、お、く、ち、う、つ、喜、小、淨、つ、ま、て
 す、り、細、と、ゆ、き、も、目、白、黄、を
 下 化 高 南 冠 子 下 化 高 子 冠 高 下

壬生山家

抄る故一、給、ま、を、あ、ら、お、き、が、雷、芝
 餅、番、な、う、う、ふ、ん、す、る、懐、帖、海

夕、月、一、更、を、持、れ、定、ま、り、て、芳
 う、寸、掃、き、う、う、う、う、難、既、風、妻
 身、を、そ、め、二、つ、ま、ま、ま、ま、な、る、金、虎
 う、あ、ら、う、け、を、お、け、め、知、の、菖、菖
 蝶、萱、を、目、利、の、う、ら、ふ、片、打、て、為
 つ、り、て、き、き、門、の、鈴、く、ち、是
 大、木、の、指、お、枝、の、ち、む、ゆ、り、妻
 野、う、妻、を、う、て、こ、か、す、儀、物、芳
 山、外、う、懸、あ、り、て、是、を、札、配、る、孫
 一、里、り、て、も、宿、を、と、る、旅、虎
 う、け、お、の、帝、威、は、良、く、な、り、て、是
 百、れ、全、う、ま、き、り、く、寸、啼、為
 社、風、の、も、あ、ら、く、と、い、ひ、の、上、若
 舟、り、の、船、を、ま、う、揚、る、舟、美
 美、法、山、の、抄、ら、ん、む、の、後、持、心、虎
 と、そ、も、す、お、ら、た、ら、う、吹、札、藤
 本、次、月、の、西、は、東、う、う、切、目、録、為
 あり、終、よ、ぬ、う、う、而、れ、あ、ら、う、芳
 の、れ、ぬ、や、富、原、う、う、の、其、家、を、是、妻
 榮、う、く、後、ふ、河、を、お、敷、ま、う、う、芳

雪の林は帯よむ志は鳥
 志くぬ山海とるよすくせ
 昔よりふとんを遊るを遊
 かくたのふよまをくもき
 むけを月と海をく人もれ
 花色れいもれを修る味
 おもひ切る徳よ因つ死
 白ひさる成志よくすく
 皆海め二尺の七まこと
 後折く市と煤揮の他
 鶴うる徳の小はくお
 村の徳をふおん嫩形
 恥羞ゆの房出る峰の月
 紫と赤松の老方一横
 おおぬのきむの甲は
 立ふくくくくくくく
 五味徳を徳とふあつと
 油くくくくくくく
 兼ひくくくくくくく

良 水 竹 菊 五 通 海 波 通 水 五 波 良 通 水 五 波 良 通

移居中ありみ極うじ危
 於月の柱くくくくく
 号とや信の柱賊男よむ
 侍らむとくくくく秋の
 度のうちくくくくく
 羊腸のそくくくくく
 情ふけくくくくく
 桂の竹くくくくく
 根とやくくくくく
 髪を結くくくくく
 菊いさくくくくく
 男あれたくくくくく
 候火柳くくくくく
 老ぬけくくくくく
 子あくくくくく
 勝くくくくく
 ぬくくくくく
 甲部くくくくく
 字くくくくく

良 水 竹 菊 五 通 海 波 通 水 五 波 良 通 水 五 波 良 通

雪丸け
 星を宵ゆき納まて止たう
 いろろけき初折の編
 瀑多踊りひそく布橋て
 此百十句あり
 秋休おくる又う旅あち
 かせきと移まつみ旅あち
 終り終あちまれば古き
 種植て小枝の能の名は
 雨のあちりけ目いそ果あり
 扉をひく雪まらう
 一ひう鳥人あ終り
 重山や後て小砂と推せん
 科のひうと高産の危
 長まとの百そふ魚の名は
 人ひそうき事のそちう
 松福あれて巻れきすあり
 子を射させたる松の床

袖珍抄附句未滿之部卷五
古終舎黙池輯

雪丸け

星を宵ゆき納まて止たう
 いろろけき初折の編
 瀑多踊りひそく布橋て

此百十句あり

秋休おくる又う旅あち
 かせきと移まつみ旅あち
 終り終あちまれば古き
 種植て小枝の能の名は
 雨のあちりけ目いそ果あり
 扉をひく雪まらう
 一ひう鳥人あ終り
 重山や後て小砂と推せん
 科のひうと高産の危
 長まとの百そふ魚の名は
 人ひそうき事のそちう
 松福あれて巻れきすあり
 子を射させたる松の床

夕暮此月やて傘をさして並 遊
 了み西瓜を貯てゆくわり 甚
 秋をく米一升も産れて 為
 賜すの報れたらえきゆき 必
 吹抜く雨のぬけくる未申 疾
 夕より雪をさうる於人 玉
 危うと子の意 命を悟よ 為
 寺ふあうし 業の定 字
 井井中を鶺鴒れ尾すて今 去
 家にとけくる森の下未 考
 いまつまればて基れへ暮扱て 有
 舟の中れまうれに袖とりく 為
 君う琴の聖の他程とさひつ 字
幽霊集といま細の白の筆をささて
 収ひ干て物と文字を空の浦 為
 月毎よかえる家とあひて 為
 乞食とくくも 捕は本の中 為
 雪して虎あうれ月もあ 為
 月あはくまをすくつは他 為
 ハツクあう子れ奥法けし 為

子名撰 知里のり

加きんを我と夜白のそひわや 箱
 妻橋やみまうるゆいのみ 登
 二つくさすも鳥ゆき 柳葉
 ろくさう袖ともうし名玉記 下端
 現され月結わりの浦伊ひ 雲
 それとをうりれ秋の風書 自笑
 捨くひと東よまゆ身書記 如風
 念力出るとくあうる字 所珍
 乃れ巴の松一喝示一登 中夜
 長者の楽了楽をわけ 為
 から橋を肩ふ下於れんれや 定
 者いかにあへんれ 兼
 表遠上 遊遊とていかに 端
 子を母の親の存ゆき 夜
 それの秋はゆるむあゆみ 玉
 猫をうく六猫芳晴く 風
 名うたけとあうまにわけ 兼
 秘このあふ節を名惜手く 兼

乙秀介遊冊ついでわらひ事 瑞
 飛りゆくきを寄羽ふき波 翁
 乙季之勅上意して雪をひく 竹
 五りたけのこやゆれ 風
 弟の賣も本々れたの使ふる 矣
 冬谷北の面らるる物に 星

雪丸け 虫にほく

又月也六日も花れ歌中の花

春のせころ相の一葉 左栗
 船方小食たくりまきけり 曾良
 海士の小舟をもせしる後 眠臥
 新啼びうよ山とんせふたり 此竹
 松の本よりけりけく枯松 亦葉
 夕ありし庭吹きくぬる花 石雷
 鹽よりゆく勝あり 水 梨葉
 空ひよりぬるをけふもひより 栗
 きぬくの場所起りあはれ 良
 数くの眼のおれ持つとして 兼平
 鏡よりうつる我よりひ 良 翁

四月の星船の月のまきけり 栗
 蒸行て暮る火の舟くゆき 雪
 磯歩もよきまきぬる葉衣 踏
 空の川と二人の山本の危 栗
 乙の吟をすもむる早ねま 季
 唄の詞をすも嫌物の舟 雪
 乙のあは舞刺の後の夜 翁
 乙まきわらひよんこのあ 良

院州集

秋の衣を穿たせしむる影丸
月すのやとい蒲を身の上巻 衣者
西の山二とぬるさの厚帯て 西
ひるゆる月のよく動くなり 時刀
買方たの満ちるといふまに世者 深
小袖を身に入替りたる大牟 博
世者も心をもとて時と志を 考
あてても医者たれん志をよる 毎
掛ひに想くしのむきらりと 庸
ちめてそちゆる弁あ乃梳 坐
紀より志をうけてる考かを 刀
すしたる影丸の世のいんらぬ 考
志の事ぬおの初賢うむれ換 然
白丸は月より伊き川 糸 膚
や輝いて美ゆをりたる侍う集 糸
七種すといふるつひまかた 刀
尺せりたる糸の苗むやふ 坐
小倉形なりたる重敷の生 然

院州集

雪やうりたる下帯の尻巾をて 板
刀の柄と水る手ぬくひ 糸
唐うりたる木衣り形は赤うけて 登水
秋衣をてよるる為蓋の幌 依々
影丸の布子とをたる世者明 考
研いて替りたる腰の巾衣 糸
あちたの葉のれを縫くと 坐
あつらむまのころの個あ 非披
白うた指の青のと平下 杉
世と切ても衣を替りたり 坐
焼きたる物へのむろ押さる 糸
貫ひよせとも茶にふあま 良
敷とをの化かたにすむ 杉
世家こ物をとより上とをて 披
お局のいとあうちある帯の月 良
取り中の帯をさめてりる 依
とつたの遺摺よりいそえて 研
坪の約す本ころといまの 熱

鄙情状 仲秋雨懐故人

念厚やと次ふ其晴をまを 酒子
 中の上杉のたうぬ中其者 菊
 秋を捨てたよをやるるの色 千川
 ますまのまの酒の酒の酒の酒 漆葉
 端たぬぬ情状昔き情うい梅
 曲さハ坂の中ふんる 洲子
 瀬ノ乃久史のけはも 川
 入江の鐘がれとたのじあり 子
 きりり情状昔き情うい梅
 舟こりり情うい梅 川
 静うももももももももももも 川
 伏かん中いりもももももももも 川
 飯のこもももももももももも 川
 舟新よまもももももももももも 川
 度此もももももももももももも 川
 花咲いももももももももももも 川
 ほろりももももももももももも 川

遊遊集

ふるもや小館のいさむ二便殿 遊
 極もすまも岩此外株 遊
 足りりり切草のたむて 遊
 刀れ極よくくる状 梨
 合極の極をりりりりりりりり 風
 登極てあもももももももももも 風
 小極もあもももももももももも 梨
 跡一文より法を傳るた 牛
 茂弱の色れまもももももももも 遊
 登極すもももももももももももも 遊
 又もももももももももももももも 遊
 古たももももももももももももも 風
 小もももももももももももももも 風
 名極を破てたれもももももももも 併
 舟新の白ももももももももももも 遊
 登人へもももももももももももも 遊
 舟掛の味やのうもももももももも 遊
 々もももももももももももももも 凡

雪舟 女幻瓦

跡墨あつゝのこゝろに梅と底草を
 みしうまきしき秋の日の影 一糸
 月よりもし影のあはる次で 花化
 透月まひしき村れ生垣ノ松
 鉄波治の門を並べて植の青 竹黄
 小桶のほろむすよめくま 浄子
 七つより生れせしは映のゆん 雲白
 冬影ちやうけりしのお本系 乙夜
 詠智の言いたあつゝ心地して 菊
 とのり 溜まひきよは出る月 比較
 机多きき嘆いたるけりて 毛糸
 をのこま本より 妙橋 流志
 二つあひけりぬき中へ 縁起 果
 さくめゆひあつゝ西け境目 菊
 糸のりも持るゝ我ぬお燕衣 枝
 あつた時なきを山の雲 口
 字は片の影もあつゝお世帯 流生
 柳うつゝもあつゝと我志 白

麻島記の

あつゝ菊こまに雑次おつゝ 松
 泥やうりゝゝ編を千を登指 哉人
 月哉日あつゝきまは旅指して 糸
 益つゝ西子をぬきむあつゝりや 芸要
 あつゝきりとりをきりき雪れ株 友五
 傍りあつゝゝ帯たつゝり 冬景
 は同じて念仏甲と名をいふ 依
 籠すてり屋の海苔うりや 匠兼
 左衛門長火の燈もあつゝる 人
 瓦あつゝゝはたあつゝる月 風
 盆を片もみ人を引きりて 茶
 くらくあつゝる名おれ貝 玉
 香のこふ物の瀬子やくる中ん 依
 小袖りぬ物ゝ登のそり子 ぬ
 経養此場はは雪浦とく人され 人
 美しひ子の孫は俄やつて 糸
 甲をきき死れ本はは豆莢や 五
 たまやう蝶乃あみまき入 葉

和曆 若むさ

月如れいし燈傳えんは是れ人
 朝夕の系柴垣れむらん 葉
 けんと志まひ山此處居て 鳥
 是うかぬのイロハおひり 及古
 南うら新うらりの 時を 葉
 しの紀をのそく山の子外 泥行
 おろろく燈はたの備くくそ 怪
 女座りし所は常き便守之 人
 勢と物さうりする 恋れ友 古
 瘡おさえてあろきま位 鳥
 中し止ぬ電れあめて怖る 雲
 さう神したる曲舞れ章 葉
 秋風や子をたぬ女の暮り 人
 谷井危のあそりしき月 依
 り居よせられて二招神り 葉
 仲し舟入る敷巻乃極 行
 危人の所中よまれ若あり 葉
 破さくはより居る春風 鳥

白餅お

江戸さうらんをん幾くお 湯子
 薩摩の事いかりえる月 鳥
 貝ひらひしり破ち終て 鳥
 破さく人れ肩よりつく 葉
 りかの葉たいて葉よりや紐文の 鳥
 柗松苗枝挿れかき 考 子
 此れ橋のくぬぬ垣の中 角
 ちねと入枕乃又やを柗載 雲
 世れ才を画くのれう葉の桐 子
 妹のかりたれ梅やうき 鳥
 記念うお餅の切らうつくし 雲
 髪を占きく固るもの鳥 子
 侍の必れうさくくと物賣て 鳥
 二扱と居りのほくし 侍 雲
 一葉の連舞をともむひさし 子
 菊し乃菊さるまうあり 雲
 破れ葉のいづちをむさく之邊て 鳥
 新置りりかきまはれ夕月 子

相曆 若おまき

月出れいけ燈消えんはまをね 哉人
朝夕のふら柴垣はふらん 葦
けえとををいふ井はまをねて ぬ
えうかぬのい口ハおひら 反古
南うう新うまのり 時を 又兼
よの記をのそく山の子外 泥行
おろろく燈はふら佛くく 悟
女房のしほの節を便守之 人
静と物うりする恋れ友 古
瘡おろろえてあろろきを位 病
中し止ぬ雪れや的て物る 琴
さうおろろたる曲舞れ章 粟
秋風や子をたぬ方の暮る 人
谷井庵のあろろしき月 依

其感 文照

隆徳の聖を仰ぐ西日の輝 法
 御座りて余は此徳乃上 為
 是方此邦の徳を痛つたをみて 高
 尚くもさするゝるを此 為
 入月上高に頼る武名ひとら 為
 榮れ人の上を成あやと氣 為
 山より登りて瓶のまゝにて 為
 雲飛来やと怪進るらし 為
 夕暮りくは帝の鞠の書 為
 ぬき於標の植を飛とす 為
 後進を標の植とすあらひて 為
 礼をく獲を要すかんだし 為
 潤ふなき記念の較も也す 為
 何も腕大工は只くくり 為
 棒の月一は直工修敷て 為
 隙つきを免く一衣の氣陰 為
 木免れおのらゆやゆぬん 為
 甲在るは風も身よりぬ 為

熱田二吾公 十一月廿一井亭

隆徳くし極の徳を此女日取 為
 庭さんせいくけりる徳書 一井
 上やんと徳を何やと兼成て 誠人
 我徳を足し清書あるは 為
 琴打く徳の玉をうさひり 為
 隆子めけりなきありとあり 誠人
 起るせし徳も白は徳しき 為
 みるけり徳此行ぬくを徳 為
 高けりもして又ありつる 為
 乳をのたると此徳し似るは 人
 麻布を徳ひるを不織ひて 為
 蘭をよりと徳は徳しきせり 為
 夕まは先よひ中を雷れ書 為
 馬も何りうぬ山徳乃書 為
 小男の病夫を徳し射書 為
 此ありる徳ある徳ある月 人
 取くからけり徳此二の 為
 高よつてく徳の徳の如り 為

九月二日高尾の歌

神宮に小幡立たるの御衣 不知
 山下のうらうらと見を森のあ 荆に
 神月やえ西を思とてつるらん 露
 岐のあすく人もゆり鳥に 如行
 木を扱て枝のくもこころあは 春寂
 海のさうめふあす千丘 残雪
 おのつゝ藤の松さかむむ心 針籠
 さあきややふまのむのあ 悲風
 いとよき人のあふく心 知
 般若の面をおもひけふは 海
 まのよしの神をよまはあは 初
 美の川ぬる月のさむしあ 柳
 高尾してたきくう昔川に 池
 洞代の鐘と市のびさたり 香
 舟の形あまうりてかえりなを 巖
 上着るも旅のささるあは 知
 花のさかあはも橋はうら 初
 歌うたてさく岨の山あき 風

其使 西思

世をやり人あつて秋の乳 乳
 岨にいとけのあふかへる者 遊
 月一ひきあまはけはあはれ 去者
 ちのさかあはと知てあふむ 遊力
 乙事合あはれとてあはれ 遊行
 海てやうみのとやうなを 去者
 所有ぬるあの中うささかろ 西思
 海のおあひもあきあはる 遊止
 縁あもあはれあはれあはれ 遊然
 極子の縁はあはれあはれ 遊極
 けいすのう宿すはあはれ 遊
 かくさした草あはれあはれ 遊
 けいすの山の橋あはれあはれ 遊
 地蔵のゆりあはれあはれ 遊
 仕のあきあはれあはれあはれ 遊
 地蔵の船のあはれあはれ 遊
 あはれあはれあはれあはれ 遊
 知例見あはれあはれあはれ 遊

後日記

ふれ船と人のとを住居 川
 苗代中と舟とあけこむ 川
 ねんふじふ金船と吹きて 未曉
 大なる舟人こころのまのあ 川
 さふきた屋敷とつるのあ 川
 くのもそくとも棟をたて 川
 耕作はひとよくお初はじ 川
 豆倉味もまじ作はゆた 川
 屋敷の孫とりたもまじり 川
 面の海見と書付りたり 川
 池堀のまじり塔とむ堀の豆 川
 管を新上と門ふ度けり 川
 切妻しゆりこころへ懐かお 川
 お植れまじり歩き青月 川
 うそ書き畑の打しちちち 川
 袖うかおろすまじりお 川
 咲せよ二徳とまじりま 川
 おひらひらまじりま 川

本曾谷

けあつちつちあつちあつち 水
 ちあつちあつちあつちあつち 水
 代々の飯屋とまじり月とま 水
 指ゆるは桶の輪と入るり 水
 船の輪と控れは船の引てり 水
 ちあつちあつちあつちあつち 水
 秋の村とやうし匠とれあつち 水
 ちあつちあつちあつちあつち 水
 番屋とれあつちあつちあつち 水
 指ゆる物のあつちあつちあつち 水
 麻糸とるおもあつちあつちあつち 水
 中務はあつちあつちあつちあつち 水
 何処もあつちあつちあつちあつち 水
 ちあつちあつちあつちあつちあつち 水
 造りまじり材とあつちあつちあつち 水
 まけてまじりあつちあつちあつち 水
 袖花とれあつちあつちあつちあつち 水
 伴があつちあつちあつちあつちあつち 水

後日記

ふの難事と人の心とを佐藤

苗れ常と舟とあけこむ 高川

杉風ふむふと病と吹まき 未晚

大なる内人こころはの

さなきた魚屋せうけの森 川

くつりまそくくも探る気 晚

耕作の心とまを初はじ 川

豆習作をまき佐藤ゆた 川

展覧の孫とくをたもまき 災

面の海目と書付りなり 川

池堀のまに塔む堀の豆 川

管を新上り門ふ度けり 災

あつたあつたあつたあ

旅川集

新撰やふの雨れ上の秋の雪 西聖
 雪をうらむ日と代替る 石舟斎
 夜接棒帯ひる花をうらむ 石舟斎
 寒きより少き道の雪も雨 小鏡
 古戰場月も静か流るる 此景
 志げりいふまゝの雲霞 志舟
 さし波の門の夜更おとせ 竹
 雪をうらむ花の雪より入 石舟斎
 水仙えさるる花川の傍 系
 藤花きた冬をうらむ 此景
 庭よりかきおの 紗の桶 漢 正秀
 小竹のふゆはかきおの 此景
 雖も雪ふるも月待の意 蕪
 懐は雪ふるも波のふゆはかき 此景
 ふゆはかきおの 此景
 花のふゆはかきおの 此景
 燈はかきおの 此景

旅人

旅人と旅人よやさん 此景
 ささるきささる 此景
 みるの神の本城と新神 此景
 ちかみありりや 此景
 小寺門の駒ひきむ 此景
 権の古枝と権よ 此景
 夜更をうらむ 此景
 老をうらむ 此景
 抱くはて 此景
 ちかみありりや 此景
 櫓子と山 此景
 志げりいふまゝ 此景
 権はかきおの 此景
 之日月やまゝ 此景
 新と入る 此景
 及侍の志げり 此景
 舟即位や 此景
 梅くちを 此景
 芭蕉は 此景

松茸やぶらわら山の取 鹿鹿
 るる 繩繩子子のの志志ららきき結結也也 土土若若
 也也 小小のの影影ととるる小小月月堂堂 秘秘唯唯
 中中のの人人ああきき次次のの赤赤風風也也 海海
 ととののああららたたるるととくく 雲雲也也 昔昔
 日日此此ささくくここみみここ羅羅好好てて魯魯 然然
 小小ののけけああ熱熱梯梯とと色色びびすす結結 為為
 重重てて廻廻りりしし件件ああのの序序後後 性性
 底底ささくく古古伊伊のの赤赤造造りり 然然
 内内ににああららすすああるる酒酒れれとと乳乳 未未
 ちち中中ののききとと又又もも痛痛めめるる際際にに行行
 とと背背のの冷冷るる油油膏膏生生じじるる 為為
 むむののああららすすああららすすととくくしし 昔昔
 又又すするる所所ととああきき油油意意結結 然然
 りりととささくくけけくく油油此此のの平平 為為
 繩繩とと引引ららるる繩繩のの上上ぬぬりり 性性

此の巻の終りにて

此の巻の終りにて

ふの他や若るき陰子けも結り
 炭れ火もあつたれもあつたれ
 宵の月舟と海と山門向けて
 又とくくくくくくくくくくく
 初巻終りてすすすすすすすす
 新巻初てんちうひささ
 松の木のよきをすすすすすす
 まく一志きり腕のあつた
 物くけきむおくく見見見見
 けすけけけけけけけけけけ
 天とあつた返せすす山 相察
 時身して次すすすすす 執事

おひひひひひひひひひひ
 糸の杖つく此の友妻 東巻
 けのさる乳とのむ乳糸にて 柱桿
 かけらふと今も竹の病棚 以端
 焼つても粟の穂とく穂とく 相察

ひとりふけりたるあめ松 工山
 茂重に淀け美古と傳ふて 若
 相身は借まぢを共く分り 菊
 鼻枝は渡さつじ女あり 閑水
 ふさけの布よ上の袍なる 裨
 堂うつ花守の意の喜也 樂
 せむるなれまじくさるる 水

句例別

ありうのうと捨と息を秋の澄 松は
 一羽のつらつら子も一羽の 菊
 枯き以てふし松のみとりて 曾良
 因中のそは通つる音申く 依し
 月やそく此のあゝおしる 以行
 秋風よる門の半 菊 水洋
 ちの糸綿を返す松の香 風泉
 雨そくたせしる葉たきせ 文菊
 松枝女ありしれあて月えて 苔翠
 契情うけとかく日 皓 花翠

同

時あくに強かりまゝは宛 華白
 火爐の染不伐とつく人 菊
 松竹こそれとつ時とてのり 依石
 物なきはくつきゆの山は月 二斎
 後ひとらうふかふ秋の香 其角
 菊の麗面をゆるとれし文 十千
 徳子もいづる娘のかさぎ 虎音
 餅二つとて白えりしと華 白
 よしふれはるは子見れはいん 菊
 清ぬしありて餅するま 石

松枝よすく入海するみれが 素来
 陸柳りろくゆるたそり色 許六
 いふすしと縁もる葉は下子 菊
 花の羽折も四五年のこと 石
 吹たれて流し浦の月まろく 千那
 橋中を折ての所らるるの 木
 月了獨于湯を茗花を多れ 六

河のほとりへ入り何れも
神のたよりをいひて
良
天をりれと地をたんと
那

仙化集

季まやあやのれい星月次 其有
半紅梅をぬむもみ然 我
まもはなまきこの子あはたて 雲
ふよりえんころみく然の所 松
ひよりあやと遊せし心より 彫栗
故きまをす秋ふありりや 栞几
有のますくむ鶴の刺み物 花
帆と八合う棹郎の考 仙化

夏想

さうけさうり二月中旬物花子 海
天下れおかけおおすくま 栞
雨あやちをひらくおさやと 竹
志ろき流まきとそゆるく 糸
やうやう赤い鳥はけのこ 炭

谷の戸はりのり看板 栞
上くきるののあはれし 而已
千里の羽もまきおの秋 栞

よのかさとすそをたかう矢

山梨信りてあやらんまき 其角
路中さうりよ飯のこきあ 炭石
物まきすす袴のひあ赤は 花
智るころあありしを 普船
羊燈をひそふ洋くあや中 盤子
いにも自由よあゆのり水 中邦
竹槍の紫ころまきあや 素
狗すうころまき宿のり 上草

雪九け

六月十五日寺島夜夜草

涼きや海へ入るるさ川 花
月とゆりあは浪の浮ゆ松 合道
志勝れぬゆく花のあや 不玉
ぬりくあやあや人さされ 定連

波とちれ打交はて布と得 曾良
彩イヤサアサる宵の油火 任暁
不機嫌のころに布と衣 風

本よりしれ等と本よりしれ 宿山 流桂
ふれ家行く雪の足と衣 舟
時たある甲の道指お値きり 舟
来よの折ゆふたおとさき 舟
あめりのおとさき人の影は 舟
みねとふ舟の今とさき 舟

子と掛

賀新表

能事や常とさきお消は代果 舟
蒜よりあつたお消は代果 舟
扱もた四の海指おとさき 舟
ゆふ掛おり月のおとさき 舟
扱はれあつたお消は代果 舟
おとさきおとさきおとさき 舟

いおつたおとさきおとさき 舟
とさきおとさきおとさき 舟
清水おとさきおとさき 舟
アサおとさきおとさき 舟
又おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟

はれよとさきおとさき 舟
むくもつたおとさき 舟
おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟

おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟
おとさきおとさき 舟

何れぞとて武蔵野の原に過ぎすま
 ろお供たりと枝のまゝを
 海を渡る舟をさぐればとて
 志願しし志ぬ具をさぐりて
 情をゆけてけしき山ささる
 懐くさひり標すの 寄 禁
 まぬとてはなとて終り美令 罪行
 秋の文うすし竹洞をさ 文道
 秋のそやきとてあつ例も無 罪
 海鳴り山より昇る雲宵 罪
 種つく秋の階子ほくし 罪

ふき掛

とせぬ菊の中へく人も花の
 之はあつて我序ありり
 くれい仔細を備へんとも
 信する法を信じていきて
 胸よりひく花の香をさして

焼倉やゆり古れ雪はるらん 知王
 砂をさうりし 寄 河の路 飛
 松をぬく力小思う子月して 飛人
 川のあつてのけり 飛 且
 胸よりさす花のあつて 飛
 くのりをかす花の月 人

ふき掛

夏炭や更し程も 寄 飛 飛人
 寄をとりて 寄 飛 飛人
 海士の子を 寄 飛 飛人
 宵戸より 寄 飛 飛人
 寄をとりて 寄 飛 飛人
 寄をとりて 寄 飛 飛人

へそをとりて 寄 飛 飛人
 寄をとりて 寄 飛 飛人
 寄をとりて 寄 飛 飛人
 寄をとりて 寄 飛 飛人
 寄をとりて 寄 飛 飛人
 寄をとりて 寄 飛 飛人

ひよりに橋をすくぬ草山 聖水

いさゝらぬ雷丸一羽かきやと 為

取れぬれぬる 於 起 竟

同く茶の餅とてぬきぬ道 爲

三十餘年より此奥より 聖人

阿比山の阿比の月夜に 考

かや約せよとや免くは以 故江

茶中より二葉より柳の枝 未申

もく汗の雲よりかきぬれぬ 爲

ぬはすのりけきき角指く 未未

人けぬらち約瓶の中あり 元北

五のり之枝飛柳のゆきん 乙州

とりの秋風より柳の下

そ運しをさしぬむむに

那の月をんこ芭蕉危を

休て

修門をすまふ受神も聖なる 風露

海と一花とありて

森る木をけし松あり竹秋の樹 中虫

阿のり月秋の底さしきる 爲

初花の山あり方けしけし 曾良

けあらりのりすおれきる 小枝

茶樹よりきれたとま枝 爲

疾れぬこれ物さけし月 樓雪

極るありぬきを秋のふせと 更也

ろのりぬけし言敷のふ 若良

又すのりぬき浮海山は 爲

枝のぬきをささるる日月 爲

後修し手まけしを推して 不玉

け了絶するろのりぬ 若良

を成る御言ちおくりしと
して家業など言作し於
あつしの御言すすしと
おのり御言すすしと

雨に降て粟は云々
その名のなれ御言すすしと
秋来ふりくとおのり

るをさへ御言すすしと
本城の上へ云々
はしとと御言すすしと
手のくまはと御言すすしと

今思地知皇の御言すすしと
く御言すすしと
旅子の御言すすしと
を御言すすしと

里はおくりし御言すすしと

神に三圖と云々
人との御言すすしと
おのり御言すすしと

御言すすしと
御言すすしと

御言すすしと
御言すすしと

御言すすしと
御言すすしと

御言すすしと
御言すすしと

加ふるに新海の風が吹くこと
 百京や放たれず六万の軒
 第や秋の空ふ山ふ家
 隨う後ひと離の條くれて
 長余さる多の所りも二一
 おろしやく離の相り
 若くはまを葉の流るる
 梅もまや雨ふも
 去れぬふも
 陽をよ
 長く
 ふ
 尖代
 う
 き
 人
 湯
 浪
 吾
 い
 う
 歸
 交
 何
 交
 門
 何
 そ
 も
 花

人皇の毛直が人
 湯水も
 浪も
 吾も
 いも
 うも
 歸も
 交も
 何も
 交も
 門も
 何も
 何も
 そも
 もも
 花も

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

木の石の間に母の影を
見るとはさかしく涙が
流るる

盛行事

風の吹く木の下に
小舟が静かに
物かたの棒を握り

水に映る花の影
波に揺れる舟
舟の影が水に

舟の影が水に
波に揺れる舟
水に映る花の影

水に映る花の影
波に揺れる舟
舟の影が水に

舟の影が水に
波に揺れる舟
水に映る花の影

水に映る花の影
波に揺れる舟
舟の影が水に

そののう漢や彼てありき

一歩志川中ら張望のあき書由

ねく知もがてき木の楠うふ

小長りそそけうそくみの虫

そのまうゆゆよりねくの敷柱

茶れゆい強きさひひ書

さくしのひひまひ物も様

まけいやくゆふくれり

かうきたの松いむう梳

山いこらうと後るま

檀の木の花にうらぬ

家さる七とこふし

梅さくきのあや

梅と梅と梅と

梅と梅と梅と

枚兼よがきと守二つひう

芭蕉の舟の長

なほよよ東海すく入る日

さりてくやけ岩れ知の

志のまき松て解き

志のひあうとる松

以下ろくと松

茂蕩るひよゆく

人せよあ花をさ

志あへんあせ

志あへんあせ

赤人たてし

七差くく

海客風入おとんふんふん

松笠雪と夏のやとりぬ梨
指一つこの足はくみゆく

おれをとき旅のふ改能き草

古人の中丸歌の本うう

山の橋むらう指むき松の塔山

すききうのちの盤四十一

秋のあふりあふりまのあふり

秋のあふりあふりまのあふり

宿中あふりあふりあふりあふり

芭蕉とらううのあふり

あふりあふりあふりあふり

田植と修トモう旅のあふり

月代や孫よもよも重雲松

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

あふりあふりあふりあふり

何となく出来ぬも何となく
向けたるは持ふゆへに

送別

秋のついで先への宮をたす
藤の葉やうら秋の葉やうら
おきて扇にうらうら秋の
鳴かす鳥かきやひかや
枝
能はとよ携うかきと葉は
香
冬のはれと風も流るる
春
子け戸や日暮とく秋の
花
花のよのすは秋の月
乙所
うれ男又とくくは虫の
文
花
うらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花

おれ果てうらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花

春の戸や日暮とく秋の
花
花のよのすは秋の月
乙所
うれ男又とくくは虫の
文
花
うらとあはれは秋の
花

冬のはれと風も流るる
春
子け戸や日暮とく秋の
花
花のよのすは秋の月
乙所
うれ男又とくくは虫の
文
花
うらとあはれは秋の
花

鳴かす鳥かきやひかや
枝
能はとよ携うかきと葉は
香
冬のはれと風も流るる
春
子け戸や日暮とく秋の
花
花のよのすは秋の月
乙所
うれ男又とくくは虫の
文
花
うらとあはれは秋の
花

おれ果てうらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花
うらとあはれは秋の
花

采女石玉のお孫のおくのまゝ

ひとり書とよむ老の目

二町ほど西又宿のきこゆこ

板比舟の豆うらとや

寒き煙又竹たひひとり掃雪

小僧あつりいりこすりあ

物解の陰出にまゝの海崎

赤煮いさ張をたつあひま

室日く書あふけきつれは

すきとてて逢ふきりり

終あふて麻笠よ入藤の懐

徳ありくらく橋の粥く

史料の里の赤と文あり

端指もろゆる阿さみ石竹

友あつりえんくつくと物あ

行るあつりたかひきつれ

孫あきあつりく福はま白

今くぬ中を大徳まゝれ各

妙を力の日殿折橋あつり

標こまの飯の赤まゝるま

石あつり細きふ船とよるま

煉掃のまごを大くつれ中

向ひのくとやあつりたり

種つくり人もたつりけち

朝日さけ小松よまの橋より

橋とよかすす市の時より

大和路へ入日いたつり花屋

摩訶きの音にかゝる秋立
きのかりな庭の橋の恵ゆり

君も居もさそれ三肌とあはれ助
友あかりの住まゆりま
かりゆり河系おもてはは後い

接いまれ玉あたはれ一留
をまの夫の指すま秋
冷きまをさうう虎不

一白洲

肩より物うらまはれ
そなたうけとあはれ

後生縁ふまはれ
まのりの縁ゆまはれ

勝る様さすはまはれ

おこそのまはれ

大船肩のゆり
ゆりうれ舟回子のゆり

虫の蛸白髪とまはれ
瓜の中ごのやまはれ

孔子の御奥のゆり
お起さるまはれ

況ゆるまはれ
萩すきまはれ

控るまはれ
南母や海杉おまはれ

後ゆり大黒のまはれ
に花まはれ

猪柵のふしき山んて
大まのゆきおきおとせ

雄のうしき集りぬん
大は奈度おきおのゆき

武者あつとくろひと
敵うしうとせしる

痛ひと物のおとめ
それ人あぬみそれ虫

てれおつとまの秋あ
有網あはけの浦浪

りそとふれいおのむら
中うつとあつと

うさつとあつと
折あつとあつと

あつとまあつとあ
け界とひつとあつと

おあつとあつとあ
ゆきあつとあつと

上のあつとあつと
あつとあつとあつと

あつとあつとあつと
あつとあつとあつと

あつとあつとあつと
あつとあつとあつと

あつとあつとあつと
あつとあつとあつと

あつとあつとあつと
あつとあつとあつと

みのおき小槌ゆゑのあ

を監工三日とて流す

萬葉のうゝ割刀とく

はよし〜ゆゑのいふ

是も又〜ゆゑのいふ

森見とひ〜き得記の母

喜提りく本枕ひらかどて

あふひれい松浦と〜

そや舟〜のうけちる系指

了和子中

作加久伊集物

和泉光山苗奈耐の秋〜

目孔飾〜の炭灰中の松一

し母〜のあひ坂とゆゑん

芭蕉母をそるは難之下

月とお葉を海のか食

枯枝と鶯のそるは秋の乳

綴り〜のゆゑん

追加

翁服句

○捨美雷を夏のやとらる

○我〜の能く枇杷は〜

○月記とあのため〜

○懐のう〜は方を入る

○旅夜子苗れつ〜

○波美の清〜

○松の茂り〜

○こせ〜

その紫ぞまよひとぎんたふか
 ○秋のこれゆく先くの昔なれ 木南
 秋の藤巻くくの秋の藤巻く
 ○芽生さう葉のまゝ柿の葉 大車
 白田けりりふかろる卯れた
 ○ふろくはなまきたるくまはな 松碩
 うたれて煤のまゝいさめあや
 ○まけふあつあつ中とく三日 如豆
 心まひてしやまを留け卯の死
 ○おろくや雨戸まゝのまゝ色 雪堂
 とおはととろふおはぬぬ
 ○色遣時をまゝはまはまはま 季平
 月ともみちと海のまゝ會
 ○宿のまゝまゝ西のまゝまゝ 震
 せんせんとまゝまゝのまゝまゝ
 ○花のまゝまゝまゝまゝまゝ 勝定
 秋ふくはるまゝのまゝまゝ
 ○海のまゝまゝ昔のまゝまゝ 塔山
 為りまゝのまゝまゝまゝ
 ○やまゝまゝまゝまゝまゝまゝ 香川

田植とくまゝのまゝのまゝ
 ○秋のまゝまゝまゝまゝまゝ 惟良
 葉はゆまゝのまゝまゝのまゝ
 ○あつあつまゝまゝまゝまゝ 如行
 古人のまゝのまゝまゝまゝ
 ○まゝまゝまゝまゝまゝまゝ 如行
 けいけいまゝまゝまゝまゝまゝ
 ○まゝまゝまゝまゝまゝまゝ 許六
 冬まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 ○まゝまゝまゝまゝまゝまゝ 本守
 かけろくまゝまゝまゝのまゝ
 ○あつあつまゝまゝまゝまゝ 巳百
 心まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 ○たぐまゝまゝまゝまゝまゝ 香川
 小まゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 ○あつあつまゝまゝまゝまゝ 團女
 若ふまゝまゝまゝまゝまゝ

○ 栴那えて日承し栴今三日 湖
 東の直れ雲 素つくと 花
 葉の中不惹の直れ雲の
 ○ 云ふて果の花は 流る 栴
 つらさのそふの流る 栴
 夕顔ふ栴の布面は月出て
 ○ 青やうと文わいりうろこ子 花
 市けりといはるる細帯 素
 日表ふまよとわくふる栴に
 ○ 長末のやまは栴のそと一 梨
 うらふとやく栴の細く 梨
 着中らるる栴のほろ切栴
 ○ 栴のむけらわく栴あつじや 栴
 わてや栴ん栴んくさ 栴
 七夕の八日ふ栴さひりて
 ○ 手高の重ふり栴ん 栴
 孫のせこの栴は栴 素
 常は月と栴くさうと
 ○ 松枝ふすふわける素は 素
 栴ねりくく栴るたそ 栴

へつすは栴は栴は丁ま風ま
 〇 雲もやま栴さすん 一 栴
 二人くさくさ大あふん
 裁物の麻のきれは下あて

いふすは孫はる柳六丁ま風事
とまよやまあさおん一凍
二人くくいさ大ある広
裁物の麻のきれはよあて

○梅たえて日承し梅今三日 湘雲
東の直に雲素つくと

菓の中不惹の良は並ひひて

○ふまえて栗のたきく流るる 梅雪

つらまこの子ふ明落る 雪霜

夕顔ふ柳る市面より出て

○青やうを又あひひらうら子 雪霜

市けり子ともしはあきさる細帯 雪霜

目まじりあきさるる



